

咸鏡北道茂山郡芝草里岩刻画をめぐる諸問題 - 東北アジア岩画の編年と系統 -

古澤義久

要旨

本稿では、咸鏡北道茂山郡に所在する芝草里岩刻画の年代と系統を明らかにするための検討を行った。まず、芝草里の周辺に所在する岩画の編年をそれぞれ行い、各地域における渦文、同心円文、菱文岩刻画の帰属時期を明らかにした。その結果、芝草里の年代及び系統について 11 通りの可能性を示した。豆満江中流域と周辺の岩画地帯の間にはそれぞれ、岩画空白・貧弱地帯がある。そこで、岩画以外の文化要素に注目すると、岩刻画の空白・貧弱地帯を通して豆満江中流域に文化的影響を及ぼしたと推定されるのは、ヴォズネセノフカ文化期の沿アムール地域との関係と、夏家店上層期の赤峰地区との関係であり、11 案のうち、この 2 つの案の可能性が高いものと考えられる。芝草里岩刻画の年代はヴォズネセノフカ文化期の沿アムール地域との関係があった場合は、新石器時代後期・末となり、夏家店上層期の赤峰地区との関係があった場合は、青銅器時代となる。いずれの編年案が正しいかを判断するためには、更なる資料の増加を待たなければならない。

I. はじめに

岩画は全世界に広く分布する遺構で、原始から現代にいたるまで、長い時期に亘って製作されたことはよく知られている¹⁾。その分布の中心地のひとつに、シベリア、モンゴル高原、極東などの北アジアが挙げられる。また、韓半島南部でも慶尚北道を中心に分布している(図 1)。韓半島北部の岩刻画の様相は従来、不明瞭であったが、近年、豆満江中流域の咸鏡北道茂山郡に所在する芝草里における岩刻画の詳細が報じられるようになり、岩画研究に一つの波紋を投げかけている。そこで、本稿では芝草里岩刻画の年代や系統について論じることとする。

II. 芝草里岩刻画の概要

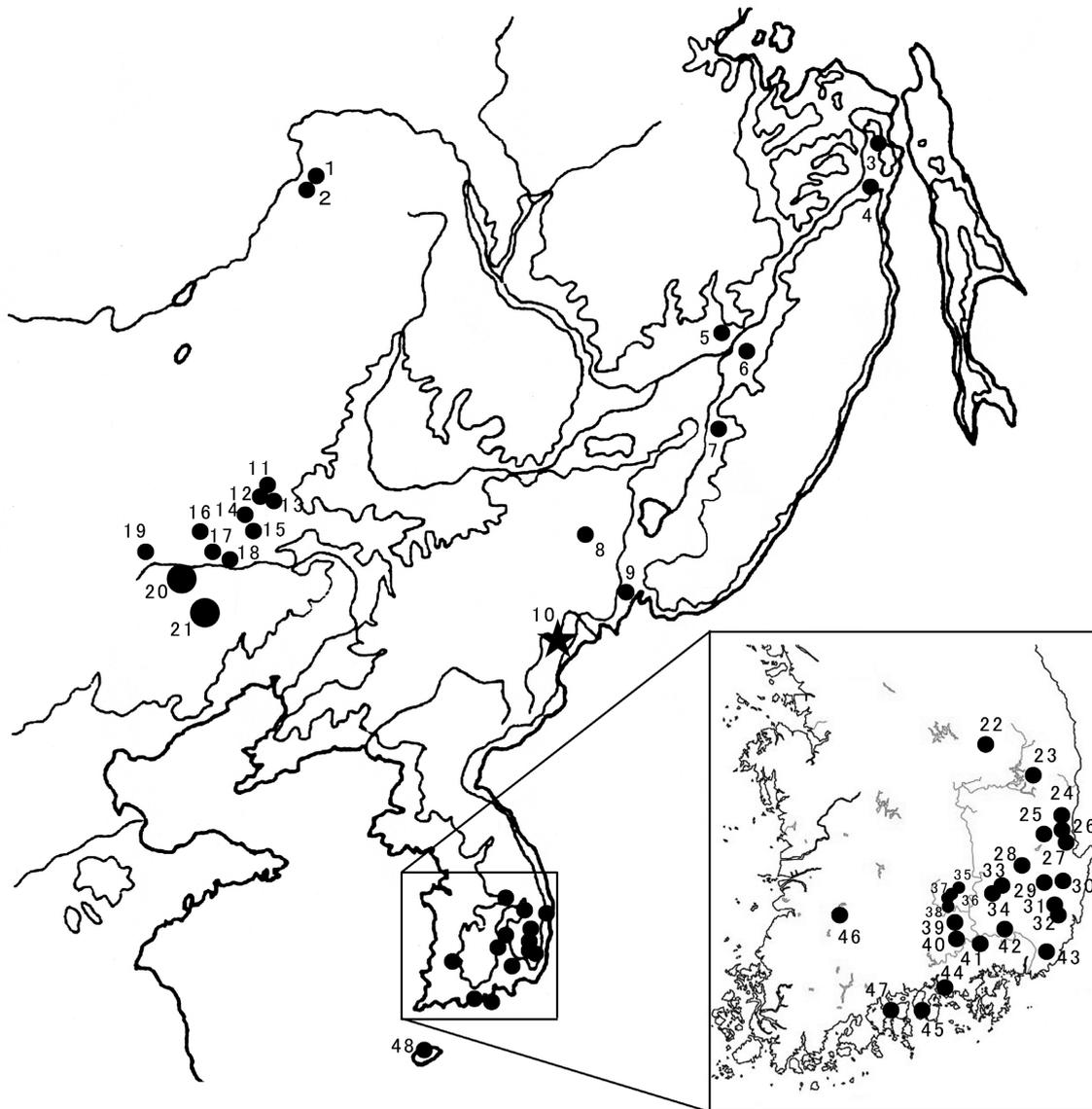
1. 芝草里遺跡の概要

(1) 芝草里岩刻画

芝草里岩刻画は 1960 年代には既に発見されており、黄基徳は渦文が刻まれていると述べていたが(黄基徳 1962)、長らくその詳細については不明であった。1990 年代には金用珩の著書(金用珩 1990)や『朝鮮全史 1 原始篇』(第 2 版)(社会科学院 歴史研究所・考古学研究所 1991)に芝草里岩刻画に関する若干の記述がみられ、2000 年代に入り림룡국による『民主朝鮮』紙の記事(림룡국 2002)、徐国泰による『朝鮮考古研究』誌の報告(徐国泰

2004)、김성국による『朝鮮考古学全書』中の概要(김성국 2009)などで徐々にその詳細について明らかにされていった。以下では徐国泰、김성국의報告を翻訳、整理し引用する。

咸鏡北道茂山郡所在地から北側に 20km 程度離れた芝草里に所在する岩刻画である。豆満江岸に南側に開口する自然洞窟があり、その洞窟の開口部西側絶壁に岩刻画がある。現地の住民はこの岩刻画を神聖な場所という意味の『神仙岩(신선마위)』や、聖人が降りてきた場所という意味の『聖降岩(성강마위)』と呼んでいる。岩壁は東から西にいくにつれ膨らみ弧線をなし、縦に 4 条の亀裂が生じているが、おおむね面は平坦である。岩刻画のある上部、すなわち地表面から 160cm 程度の高さには、壁面を彫りだす鑿の痕跡でなされた帯線が横に 1 条生じており、その幅は 30cm で長さは 6m 程度である。これをみると、元来 6m 程度の区間に壁画が刻もうと試みたこととともに、壁画を刻んだ壁面もある程度、手を入れて平坦に調整したことがわかる。岩刻画は洞窟開口部の西端から 40 ~ 50cm 程度離れた西側部分、そして地表面から高さ 20 ~ 30cm 程度上部に刻まれているが、壁画が刻まれている範囲は高さ 130cm、幅 320cm 程度で、壁画を刻もうと選定された区画の半分程度の範囲である。壁画は尖った工具による敲打技法で溝を彫ってできた溝線で刻まれている。溝線の幅は普通、1 ~ 1.5cm 程度であるが、それよりある程度細いものや、



1交傍呵道,2阿娘尼河,3マイ,4カリノフカ,5キヤ川,6サカチ・アリヤン,7シェレメチエヴォ,8群力,
9《メドヴェージ・シェーキ》,10芝草里,11烏努克齊山,12白音温都,13查布嘎吐,14半拉山,15三龍山,
16床金溝,懷陵前山,17鹿山,18東馬鬃山,19砧子山,20白岔河岩画群,黒山頭,河沿,洞子,棚子店,土城子,
21陰河岩画群,紅山,22可興洞,23水谷里,24七浦里,25仁屁里,26大蓮里,27石里,28甫城里,29金文台,
30安心里,31川前里,32盤亀台,33辰泉洞,34川内里,35鳳坪里,36良田里,37池山洞,38安和里,39苧浦里,
40馬双里,41道項里,42新安,サルレ,43福泉洞,44本村里,45良阿里,46南原大谷里,47五林洞,48光令里

図1 東北アジア岩画の分布

太い溝線もある。岩刻画の内容はさまざまな図案の渦文²⁾と雷文であるが、圧倒的多数は渦文である。渦文図案には単純に円となるもの、多重の同心円であるもの、時計のぜんまいのように渦巻くもの、『∞』形の輪のようになるものがある。1番目と3番目の図案の渦文はそれぞれ6個ずつ、2番目の図案の渦文は5個、4番目の図案の渦文は3個が刻まれている。そし

て同心円の渦文図案には2重になるものと3重になるものがあり、時計のぜんまいのように渦巻くものの中には2～3重に渦巻くものと、6重程度渦巻くものがあり、『∞』形の輪をなすものの中にも、2～3重になるものと5重になるものがあるが、多重になるものがより大きく刻まれている。そのほかに雷文もあり、雷文とも渦文ともみられる文様が刻まれている

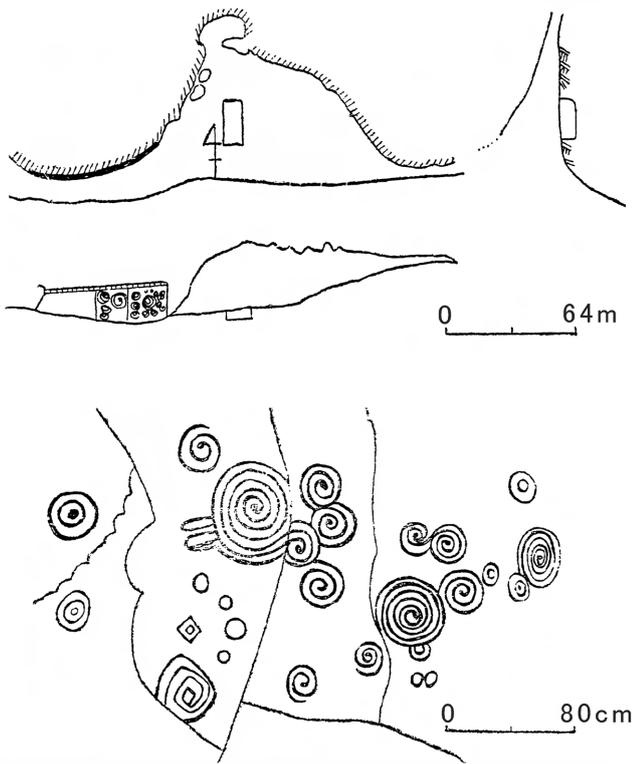


図2 芝草里岩刻画

ものがある。雷文は重ねて刻んだ菱形文様であるが、1個のみ刻まれている。そして、渦文とも雷文ともみることができるものは時計のぜんまいのように渦巻いているが、ある部分では弧線をなし、ある部分では角ばって渦巻いている。文様の大きさも多様で、その配列状態もある程度区分される。比較的大きく刻まれた文様は『∞』形の輪をなした渦文であるが、その中でも最も大きいものの長軸は75cm程度で、小さなものの長軸は40cm程度である。この文様は壁画面の上部中央に配置されている。次に大きく刻まれている渦文は時計のぜんまいのように渦巻いているもので、その中で最も大きいものは直径40cm、小さなものは直径20cm程度である。この文様は『∞』形渦文の上部に1個刻まれており、残り5個は壁画面東端中間部分から下部中央部分にかけて斜めに下がりながらほぼ一列に配置されていた。渦文とも雷文ともみることができるものも比較的大きな部類に属するが、その長軸は40cm程度である。この文様は壁画面西側下部に配置されている。この文様の直上には重菱形文である雷文が刻まれているが、長軸は16cm程度である。同心円の渦文にも直径が30cm程度のものから10cm程度のものまで、さまざまな大きさを持つものがあるが、この文様は壁画面の両端部分に縦列をなして2個ずつ配置されており、残りの1個の

みはやや内側に入ったところに配置されていた。最も小さく刻まれた渦文は円になっているものがあるが、その中で最も大きいものは直径10cm、小さなものは直径4cm程度である。この文様4個は雷文の西側部分を廻りながら弧線をなして配置されており、残りの2個は最も大きく刻まれた時計のぜんまいのような形の渦文の下部に配置されている。このように文様の配置に明らかな秩序を探し出すことは困難であるが、文様の趣旨と個性的特徴がよく示され、多くの労力を投入し、壁画を創作したことがわかる(徐国泰2004、김성국2009)(図2)。

(2) 芝草里墓地

芝草里岩刻画のある洞窟内で墓地が発見されている。この墓地は長方形の墓壙を掘り、河原石を敷いた後、4枚の板石で築かれた石棺墓である(図3)。石棺の大きさは南北長210cm、東西幅85cm、残存高40~45cmであるが、板石の上部は欠けていて、本来の高さは50cm程度であったものと推定されている。石棺内からは頭位方向を北にした人骨が出土している。また、副葬品としては突起のついた赤褐色の平底深鉢1点(図3-1)、黒色磨研の鉢1点(図3-2)、高杯1点(図3-8)、突起のついた赤褐色の口縁部2点(図3-3,4)、赤褐色の平底底部3点(図3-5~7)がみられる。また、獣骨を研磨して製作された円盤形の紡錘車1点(図3-9)、内湾する骨を輪切りにして研磨して製作された管玉2点(図3-10,11)も副葬されていた。

徐国泰は墓地の年代について突起附土器、黒色磨研土器、高杯、骨製紡錘車、管玉から虎谷4期(黄基徳1975)のものであると判断している(徐国泰2004)。

筆者は徐国泰の見解がおおむね妥当なものであると考えるが、突起附土器でより類似した事例は虎谷5期に編年される虎谷38号住居址にみられるため、やや年代が遅くなる可能性もある。なお、骨製円盤形紡錘車は虎谷4期の11号住居址のほか、豆満江流域では柳庭洞類型に属する金谷水庫南山(朴潤武1985)、新興洞(王培新等1992)などでみられ、虎谷4期-柳庭洞類型時期に特徴的な紡錘車である(Furusawa2007)。従って、芝草里石棺墓の年代は虎谷4期~5期に編年されるものと考えられる。

2. 従来の想定年代

黄基徳は渦文土器と雷文土器が時期差であることを明らかにしたが、芝草里岩刻画には渦文がみられることから渦文土器時期のものであると論じた(黄基徳

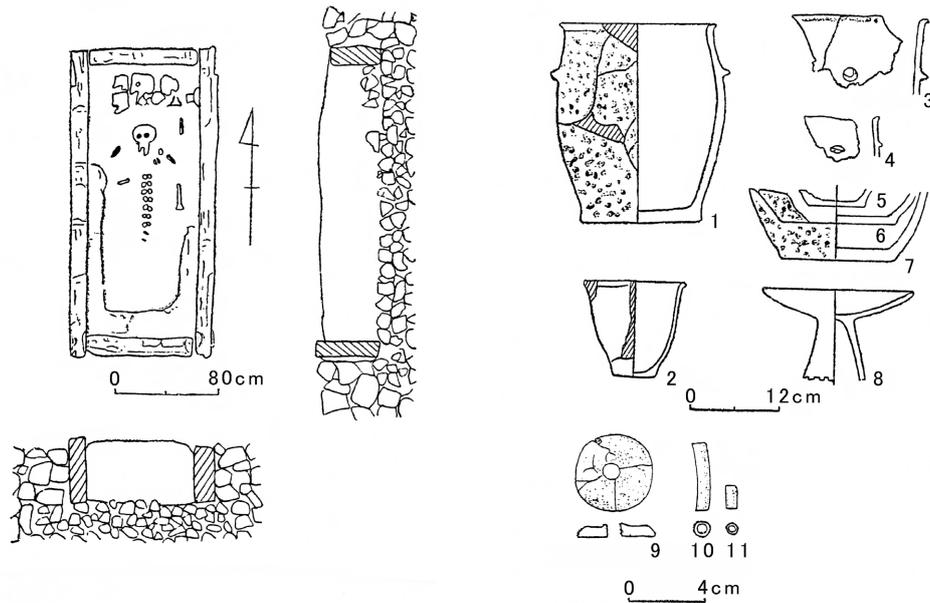


図3 芝草里石棺墓及び出土遺物

1962)。金用珩も岩刻画の文様図案が新石器時代の土器によくみられるものであるとし、新石器時代のものとした(金用珩 1990)。『朝鮮全史 1 原始篇』(第 2 版)でも同様に、蔚州郡川前里岩刻画例とともに渦文土器・雷文土器との対比から新石器時代の所産であるとしている(社会科学院 歴史研究所・考古学研究所 1991)。림룡규は渦文・雷文が刻まれた岩刻画が川前里に存在することを指摘すると同時に、西浦項や黒狗峯などで出土した渦文土器や雷文土器を根拠に新石器時代のものであると述べている(림룡규 2002)。徐国泰や김성규は芝草里岩刻画に渦文と雷文が刻まれていることからみて、新石器時代中期末～後期初に該当するものであると述べている(徐国泰 2004、김성규 2009)。この場合、芝草里石棺墓とは年代的な接点がないため、直接の関係はないということになる。

一方、南韓で芝草里岩刻画を紹介した최광식は、これまで知られた南韓における他の岩刻画と同様に青銅器時代のものとみている(최광식 2007)。ただし、최광식의紹介文には事実誤認がある³⁾。李夏雨は洞窟内の石棺墓と必ず関係するとは限らないとしながら、幾何文岩刻画や同心円が農耕と関連性が深いので、青銅器時代のものとみるのも妥当であるとし、祈雨祭と関連すると思われる同心円文、渦文、雷文という幾何文が共に現われ、規模も比較的大きいという点を考慮し、一旦、川前里岩刻画と比較される青銅器時代中期程度であるとしている(李夏雨 2011b)。

3. 芝草里岩刻画年代に関する問題点

北韓では、一貫して土器に描かれた渦文や雷文と、芝草里岩刻画にみられる渦文や雷文を比較し、新石器時代の所産であるとする見解が主張されてきた。特に、更に年代を絞り込むと豆満江流域の土器編年上における新石器時代中期末～後期初とする見解が提示されている。しかし、渦文・同心円文や方形文のような文様は、岩刻画としては一般的な文様であるため、必ずしも土器の文様の年代に限定されるものではないと考えられる。従って、北韓の見解をそのまま首肯することはできない。一方、南韓の研究者が主張するように主として青銅器時代と推定されている韓半島南部の岩刻画の年代から芝草里岩刻画の年代も同様に青銅器時代とするためには、芝草里岩刻画と韓半島南部の岩刻画の関連が明確でなければならないが、現状では関連性が証明されていない。従って、芝草里岩刻画の年代は現況では確定されたものではないことがわかる。そこで、豆満江中流域に位置する芝草里岩刻画の年代や文化的背景を考察するため、芝草里に比較的近接した地域に存在する他地域の岩刻画と比較する方法を筆者は採用したい。

東北アジアの中で豆満江流域と比較すべき岩刻画は、沿海州の岩画、牡丹江流域の岩画、沿アムール地域の岩画、赤峰地区の岩画、韓半島南部の岩刻画である。そこで、本稿ではそれぞれの地域の岩画の年代等について検討したい。



1《メドヴェージ・シェーキ》,2アルセニエフ博物館所蔵岩刻画

図4 沿海州の岩刻画

III. 沿海州の岩刻画

ウラジオストクから 88km、ウスリースクから 20km の距離にあるウスリー線バラノフ駅の対面にあるスイフン川附近に《メドヴェージ・シェーキ》と呼ばれる岩刻画がある。A. S. フェドロフにより 1928 年に報告されており、岩面に 3 点の顔画が刻まれている (Окладников 1971) (図 4-1)。

詳細な来歴は不明であるが、ウラジオストクに所在するアルセニエフ名称国立沿海州博物館所蔵品に 2 点の動物画が線刻された 300 × 290 × 35-40cm の岩があることが Д. П. プロジャンスキーと Н. А. Панкратьева によって紹介されている。1 点はヘラジカ、1 点はノロシカを描いたものとされている (図 4-2)。沿海州に類例はないため、沿アムール地域かシベリアから招来された可能性もある。サハの岩刻画との類似も指摘されている (Бродянский, Панкратьева 2003)。

IV. 牡丹江流域の岩画

黒龍江省牡丹江市海林市柴河鎮群力村附近の牡丹江右岸に岩画が存在する。シカの画像、シカと人物像の画像、人またはクマの画像、涼棚の下で男女が座っている画像、母獣の可能性のあるシカの画像、左端に操舟をしているとみられる人物、中央右よりには箱または漁網を両手で掲げる人物、右端にはやや身を屈め立っている人物がみられる舟の画像が朱紅色の顔料で描かれている (黒龍江省博物館 1972) (図 5)。

蓋山林は赤色顔料で塗彩する点、岩画の数量が少なく、大型の画像が欠ける点、個別に画像が描かれる点、シカなどが卓越する点などの諸点で、内蒙古自治区根河市の阿娘尼河、額爾古納市の交叻呵道 (趙振才 1987) などの大興安嶺の岩画と共通するとみている。

そして、年代についてはシカ飼育の様相から青銅器時代後期から前期鉄器時代であるとした (蓋山林 1993、蓋山林・蓋志浩 2002)。また、李亨求も同様に大興安嶺との共通性について述べている (李亨求 1996)。

V. 沿アムール地域の岩刻画

1. 岩画の所在と内容

沿アムール地域の岩刻画については、A. П. オクラドニコフによって非常に詳細に調査・研究されている。ここでは、オクラドニコフの一連の著作 (オクラドニコフ 1968, Окладников 1968, 1971, 1989, Окладников, Деревянко 1973, Okladnikov 1981) を基に、サカチ・アリャン⁴⁾、シェレメチエヴォ、キヤ川、カリノフカ、マイといった沿アムール地域の岩刻画について概略を述べる。

サカチ・アリャン岩刻画はアムール河に面したサカチ・アリャン村およびマルィシェヴォ村附近に所在する。川岸に自然状態で分布する玄武岩に画像が刻まれ

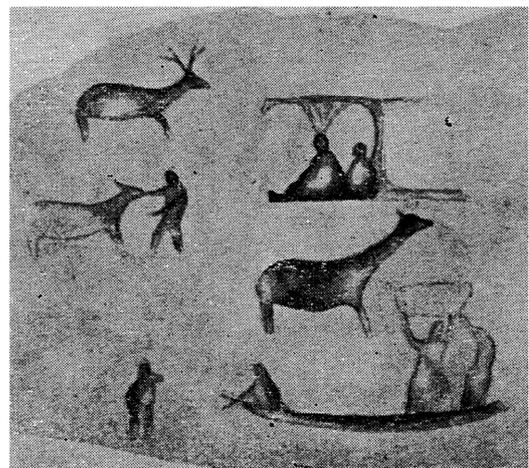


図5 牡丹江流域群力岩画

ている。分布としてはアムール河南岸にⅠ～Ⅵ群が確認されている。モチーフとしては仮面と考えられる人面、シカ、ウシ、ヘビ、カモやガンといった水鳥などの動物、舟、狩猟場面、渦文などの幾何文などが認められる。多くは敲打技法により製作されているが、線刻技法により製作されているウマやトラなどの動物画なども確認されている。

シェレメチエヴォではウスリー川に面した岩壁に岩刻画が認められる。モチーフとしては仮面とみられる人面、シカ、イノシシなどの動物、水鳥、動物の足跡、舟、渦文などがみられる。

キヤ川（チョルトヴォ・プリョーツ）では川に面した岩壁に岩刻画が認められる。仮面とみられる人面、シカ、水鳥、舟などがみられる。

アムール河下流域に位置するカリノフカでは1箇所の岩壁に岩刻画が認められる。舟と仮面とみられる人面画が確認されている。

アムール河下流域に位置するマイでは線刻によりウマ、シカなどの動物、人物、鳥、重弧文・鋸歯文などが描かれている。

2. これまでの想定年代

A. П. オクラドニコフはサカチ・アリヤンをはじめとする沿アムール地域の岩刻画について4段階に区分している。

1段階はヘラジカまたは雄ウシ、ウマなどの動物画が描かれる。動物画に家畜は認められず、野生動物が描かれている。サカチ・アリヤン69号岩など仮面画の一部もこの段階に属する。頭蓋骨、サカチ・アリヤン44号岩のような頭部またはサルを一般化した外形の仮面などがこの段階に該当する。これらの仮面は簡潔な線による表現と細部の装飾に乏しいことが特徴である。幾つかの穴や穴の組み合わせも簡潔でかなりの程度風化していることから、該期に属するものとみられる。サカチ・アリヤンの中石器時代層で出土した珪岩製の鳥形像とサカチ・アリヤン10号岩に描かれた鳥画との類似性から中石器時代が想定されている。

第2段階では仮面画が盛行し、仮面画の内部を複雑な幾何文で充填したものが多くみられる。カモやガンといった水鳥画もこの段階に該当するものと考えられている。この段階のサカチ・アリヤン号岩のような人面画とヴォズネセノフカ（Okladnikov 1972）およびマルィシェヴォ（Okladnikov, Дервянко 1973）出土の人面描写のある土器の人面画（図7-1）とサカチ・アリヤン50号岩に描かれた人面画（図7-2）は極めて近似していることから、第2段階はスーチュ島1

号住居址、コンドン、ヴォズネセノフカ中層に代表される渦文土器に代表される新石器時代最盛期、すなわち今日のヴォズネセノフカ文化という時代が想定されている。

第3段階は型的に分離される。装飾傾向の強化、抽象性の発展によって特徴づけられる。仮面のほかに渦巻や同心円で胴部を充填するサカチ・アリヤン63号岩や65号岩などのヘラジカ画像などがこの段階に該当する。おそらく紀元前2千年紀から紀元前1千年紀初という時代が想定されている。

第4段階はカリノフカやサカチ・アリヤン81号岩などが該当する。カリノフカではそれ以前の敲打技法ではなく、線刻技法により岩刻画が製作されており、以前の段階とは区分される。また、仮面自体も台形の輪郭、長方形または正方形による口の表現、直線により三角形や長方形に形成された眼などの諸点で、サカチ・アリヤンなどの多くの仮面画とは区分される。また、サカチ・アリヤン81号の渦文など曲線幾何文で構成された仮面画も線刻技法で製作されており、カリノフカ同様この段階に位置づけられる。ただしこの段階ではカリノフカのような北では直線様式、サカチ・アリヤン81号岩のような南では曲線様式が多用されるという地域性も顕在化する。この段階の年代は紀元前1千年紀から紀元後1千年紀が想定され、金属器時代、靺鞨時代に該当する（Okladnikov 1971）。

しかし、後にオクラドニコフは沿アムール地域の岩画を大きく、新石器時代と靺鞨時代に分類し、サカチ・アリヤン、シェレメチエヴォ、キヤ川に加え、カリノフカも新石器時代に編年している（Okladnikov 1989）。

馮恩学はサカチ・アリヤンの岩刻画について古い時期と靺鞨時期に大きく区分しているが、古い時期は新石器時代中・後期から青銅器時代であるとみている。オクラドニコフの指摘のとおり、ヴォズネセノフカ出土人面画土器との比較から新石器時代中・後期のものが含まれるとする。一方で、人物画や動物画にみられる肋骨等の透視表現についてトゥヴァのモンゴル高原族のシャマン服や青銅器時代のトゥヴァやモンゴル高原の鹿石でもみられるとし、シャマニズムで顕著にみられる肋骨表現は新石器時代に既に出現していたと述べている（馮恩学 2002）。

伊藤慎二もサカチ・アリヤン、シェレメチエヴォ、キヤ川の岩刻画について特に人面状の岩刻画に関してはマルィシェヴォ文化新段階の渦文の1種やヴォズネセノフカ文化古段階a期の人面状の土器文様と酷似した例がみられるため、該期に描かれたものを少な

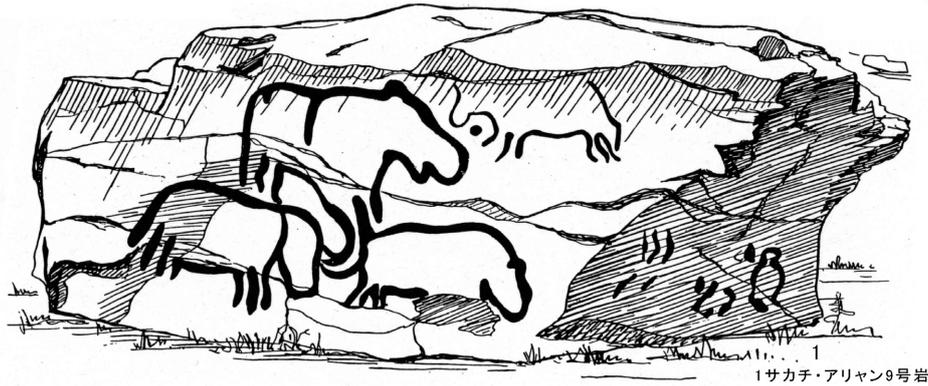


図6 沿アムール地域ヴォズネセノフカ文化以前と推定される岩画

らず含まれるとしている（伊藤 2006）。

3. 沿アムール地域岩画の編年

ヴォズネセノフカ文化またはやや先行するマルィシェヴォ文化新段階の土器にみられる渦文および、ヴォズネセノフカ等出土土器の人面画との類似から、サカチ・アリヤンにおける多くの部分はヴォズネセノフカ文化を前後する時期に位置づけられるというこれまでの研究成果は、年代決定上、确实性の高いものとして首肯しうる。特に、ヴォズネセノフカ文化期土器にみられる人面画（図7-1）とサカチ・アリヤン50号岩（図7-2）をはじめとする人面画ではハート形の頭部、二つの穴による鼻部表現等でその類似性は非常に高く有力な根拠となる。シェレメチエヴォやキヤ川の岩刻画もサカチ・アリヤンの岩刻画と類似性が高く、同様の時期を想定することができるであろう（図7～図9）。この段階はオクラドニコフの1971年案における第2段階にあたる。第3段階と第2段階は型式学的に分離されるとされていたが、個々の岩刻画を2つの段階に分離することは困難な部分もあり、本稿ではヴォズネセノフカ文化を前後する段階として一つの段階として取り扱う。

それではオクラドニコフ1971年案における第1段階すなわち中石器時代に遡る岩刻画は認められるのであろうか。その根拠となったサカチ・アリヤン出土珪岩製鳥形像は鳥と認められるか困難な部分があり、また岩刻画との類似も根拠としては弱い。このため、サカチ・アリヤン岩刻画に中石器時代のものが含まれるという考え方には検討の余地があり、その正否を判断するのは困難である。ただし、典型的なヴォズネセノフカ文化期を前後する時期の岩刻画にみられる渦文や同心円文を多用した動物画とは区分される9号岩、21号岩、28号岩など古拙な印象の動物画（図6）も

存在するため、ヴォズネセノフカ文化期を前後する時期に先行する段階の岩刻画が含まれる可能性もある。

ヴォズネセノフカ文化期以降の岩刻画としては、サカチ・アリヤン36号岩、81号岩、83号岩、84号岩、100号岩等、マイなどの資料を挙げることができる（図10）。これらの資料は敲打技法ではなく線刻技法で製作されており、ヴォズネセノフカ文化期を前後する時期の岩刻画とは区分される。また、モチーフとしても騎馬像が認められるなど、金属器時代に属することは疑いのないところである。オクラドニコフは靺鞨時代まで年代を遅くみる見解を示しているが、年代の下限を決定することが困難であるため、本稿では暫定的に金属器時代としておく。カリノフカの年代はオクラドニコフ1971年見解と1989年見解⁵⁾で位置づけが異なっており、1971年見解では金属器時代・靺鞨時代とされていたが、1989年見解では新石器時代の所産となっている。1971年見解における指摘のとおり人面画はサカチ・アリヤン、シェレメチエヴォ、キヤ川のものとは輪郭や口などの表現が異なっているため、異なる時期のものである可能性がある。舟の表現（図7-1）はサカチ・アリヤンのヴォズネセノフカ文化期を前後する時期の資料（図7-8）でも、金属器時代の資料（図7-3）でも、形態が類似しており、分期の基準として利用するのは困難である。技法としては線刻技法であると報告されているので、本稿では金属器時代の所産であると判断するが、人面画や舟のモチーフがみられる一方、サカチ・アリヤン線刻画やマイのようなウマ、騎馬などの表現はみられないので、金属器時代の中でも早い段階のものではないかとも考えられる。以上の編年案を整理したものが表1である。

4. 渦文・同心円文のある岩画の年代

沿アムール地域でみられる岩刻画のうち、芝草里で



1 ヴォズネセノフカ出土土器,
 2 サカチ・アリヤン50号岩,
 3 サカチ・アリヤン8号岩,
 4 サカチ・アリヤン58号岩,
 5 サカチ・アリヤン70号岩

6 サカチ・アリヤン43号岩,
 7 サカチ・アリヤン62号岩,
 8 サカチ・アリヤン91号岩,
 9 サカチ・アリヤン64号岩,
 10 サカチ・アリヤン98号岩

図7 沿アムール地域ヴォズネセノフカ文化前後の岩画 (1)



0 20cm
 0 40cm
 (1, 2, 7, 11, 12)

1, 2 サカチ・アリヤン 25 号岩, 3 サカチ・アリヤン 38 号岩,
 4 サカチ・アリヤン 6 号岩, 5 サカチ・アリヤン 13 号岩,
 6 サカチ・アリヤン 23 号岩, 7 サカチ・アリヤン 55 号岩,
 8 サカチ・アリヤン 57 号岩, 9 サカチ・アリヤン 66 号岩,
 10 サカチ・アリヤン 82 号岩, 11, 12 サカチ・アリヤン 63 号岩,
 13 サカチ・アリヤン 65 号岩

図 8 沿アムール地域ヴォズネセノフカ文化前後の岩画 (2)

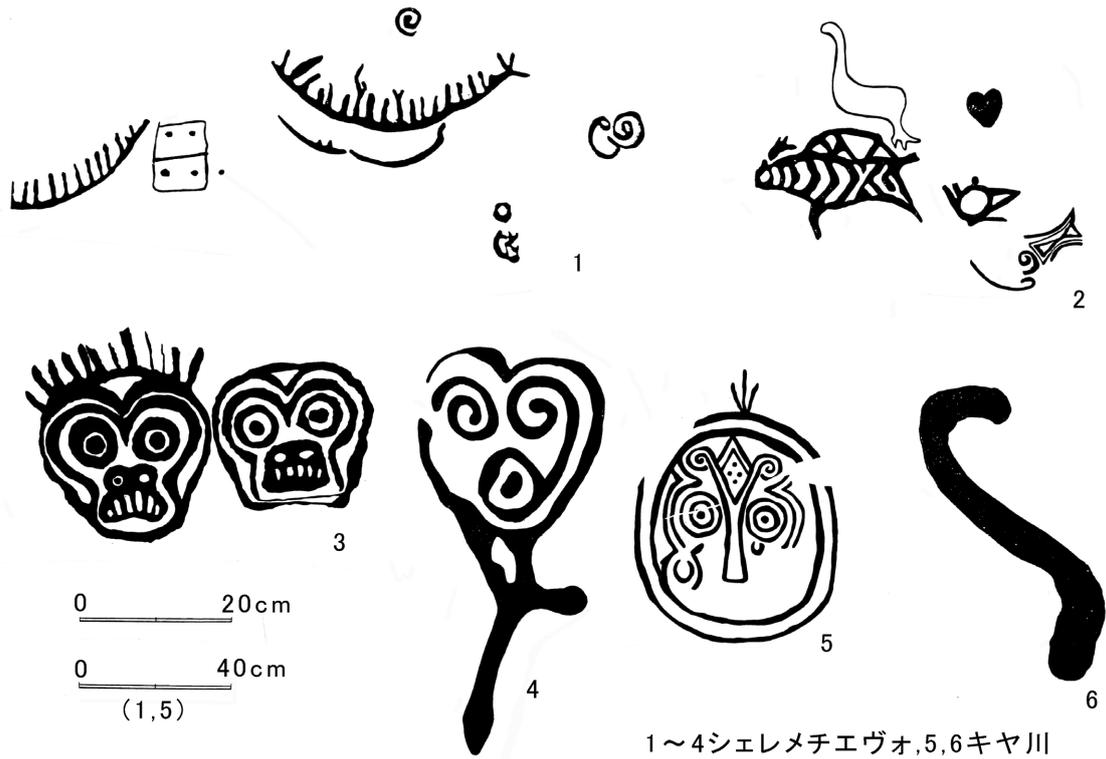


図9 沿アムール地域ヴォズネセノフカ文化前後の岩画 (3)

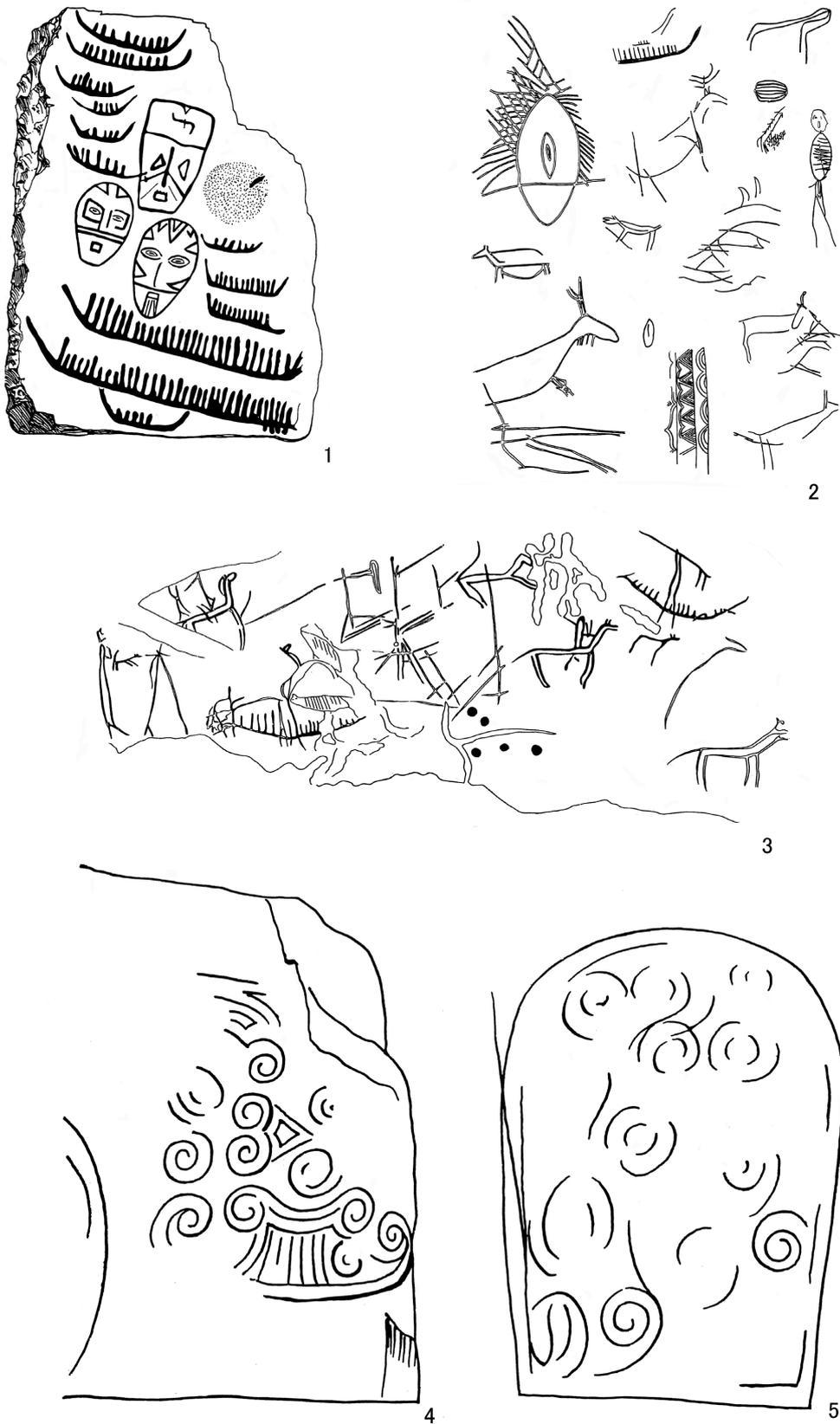
みられた渦文および同心円文がみられる岩画は次のとおりである。渦文はサカチ・アリヤン8号岩(図7-3)では人面画、モチーフ不詳画とともに、58号岩(図7-4)では単独で、70号岩(図7-5)ではモチーフ不詳画とともに、シエレメチエヴォ(図9-1)では舟画の直上で、キヤ川(図9-6)では人面画や動物画などとともに確認される。同心円文はサカチ・アリヤン43号岩(図7-6)では不明動物画(?)とともに、62号岩(図7-7)では人面画とともに、63号岩(図8-11)では人物画、シカ画などとともに、64号岩(図7-9)ではモチーフ不詳画とともに2個が並んで、91号岩(図7-8)では舟画とともに、98号岩(図7-10)ではモチーフ不詳画とともに確認される。このほかに人面画や動物画の内部を渦文や同心円文で装飾する事例が非常に多く認められる(図8、図9)。人面画の眼を同心円文で表現する例が多い。また、人面画は輪郭を表現するものと表現しないものがあり、無輪郭人面画の場合、眼を同心円文で表現することが多いことから、同心円文のみの岩刻画であっても遺存状態によっては、本来無輪郭人面画であるものが含まれている可能性がある。以上は上記編年案に従うと同伴画の様相からヴォズネセノフカ文化期を前後する時期の所産である。金属器時代の事例としては

渦文がサカチ・アリヤン81号岩(図10-4,5)で認められる。以上を総括するとヴォズネセノフカ文化期を前後する時期に渦文および同心円文、金属器時代に渦文が沿アムール地域では認められるということになる。

VI. 赤峰地区の岩画

1. 岩画の所在

赤峰地区は陰山山脈を中心に多く分布する一連の岩刻画群の東端を担い、数多くの岩刻画が発見されている。なお、本稿における「赤峰地区」とは赤峰市と扎魯特旗などの通遼市の一部を包含する地区を指す。これまで発見されている岩画には^{ジャールトホシヨウ}扎魯特旗に所在する查布嘎吐、白音温都、烏努克齊山(蓋山林1993、蓋山林・蓋志浩2002)、^{アルホルチンホシヨウ}阿魯科爾沁旗に所在する半拉山(趙国棟1992)、三龍山(張松柏1998)、^{バイリンバロンホシヨウ}巴林右旗に所在する床金溝、東馬鬃山、鹿山(董劍英・張松柏1992、蓋山林1993、吉平1994、蓋山林・蓋志浩2002)、懷陵前山(張松柏1998a)、^{フシグテンホシヨウ}克什克騰旗の白岔河流域に所在する永興、板石房、広義、烏蘭坝底、双合、大河隆、大河隆山前村、胡角吐、溝門、哥佬營子、裕順広村(張松柏・劉志一1984、張松柏1996、1998b)、西拉木倫河流域に所在する黒山頭(趙国棟



0 20cm 0 40cm 1カリノフカ, 2マイ, 3サカチ・アリヤン36号岩, 4, 5サカチ・アリヤン81号岩
(1, 2)

図 10 沿アムール地域金属器時代の岩画

表1 沿アムール地域岩画の編年

時期	岩画	渦文	同心円文	人面画渦文	人面画同心円文	動物画渦文・同心円文
ヴォズネセノフカ文化期前後以前	サカチ・アリヤンの一部(?)					
ヴォズネセノフカ文化期前後	サカチ・アリヤン、シエレメチエヴォ、キヤ川	サカチ・アリヤン8号岩、58号岩、70号岩、シエレメチエヴォ、キヤ川	サカチ・アリヤン43号岩、62号岩、63号岩、64号岩、91号岩、98号岩	サカチ・アリヤン25号岩、38号岩、シエレメチエヴォ、キヤ川	サカチ・アリヤン6号岩(無輪郭)、13号岩、23号岩(無輪郭)、55号岩、57号岩、62号岩、63号岩(無輪郭)、66号岩(無輪郭)、82号岩、シエレメチエヴォ、キヤ川	サカチ・アリヤン63号岩、65号岩
金属器時代	カリノフカ、サカチ・アリヤン36号岩、81号岩、83号岩、84号岩、100号岩等、マイ	サカチ・アリヤン81号岩				

1992)、河沿、洞子、棚子店(韓立新 2004)、葦塘河流域に所在する土城子(孫継民 1994)、達里湖北岸に所在する砬子山(孫継民 1994、韓立新 2004)、翁牛特旗オンニョドホショーに所在する白廟子山(呉甲才 2007)、赤峰市紅山区に所在する紅山(張松柏 1998、蓋山林・蓋志浩 2002)、松山区に所在する陰河流域の第1地点～第11地点(蓋山林・蓋志浩 2002、田広林 2004)などが挙げられる。

2. 内容と特徴

扎魯特旗の查布嘎吐では人面画などが刻まれている。阿魯科爾沁旗の半拉山では人物像などが刻まれている。三龍山では8字形の図形が刻まれている。巴林右旗の床金溝では人面画などが刻まれている。東馬鬃山では赤色鉱物で舞踏画などが描かれている。

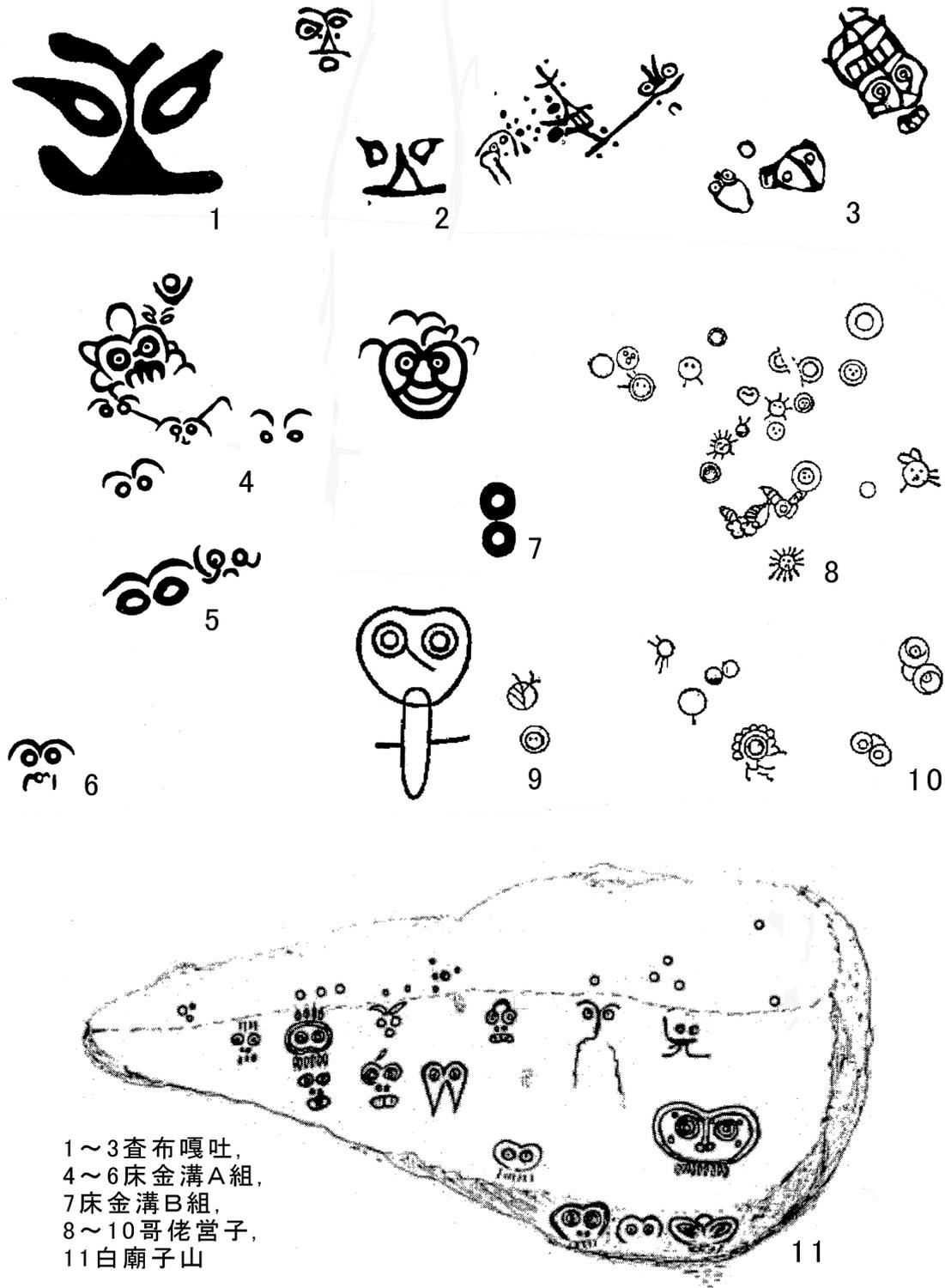
克什克騰旗の永興、板石房、広義、烏蘭坝底、大河隆、胡角吐、溝門、哥佬営子では白色顔料を用いた岩画が多くみられる。板石房、烏蘭坝底、大河隆、溝門、哥佬営子では顔料を用いた塗彩岩画とともに線刻による画像がみられ、双合では線刻のみがみられる。シカ等の動物画、狩猟画が多いが、舞踏画もみられ、双合、大河隆、溝門、哥佬営子では人面もみられる。張松柏と劉志一は、内蒙古西部やシベリアで褐色の顔料、敲打技法、動物の表現における誇張技法(透視技法や足跡)が多用され、放牧場面が描かれるのに対し、白岔河流域では白色の顔料、線刻後研磨する技法が多用され、動物も写實的に現実の比率で描かれ、狩猟場面がみられることなどで、差異がみられることを指摘している(張松柏・劉志一 1984)。孫継民は克什克騰旗の岩画について、まず線を刻み敲打で陰刻する技法、敲打の後研磨する技法、顔料で描く技法、敲打技法、金属製の利器で陰刻する技法の5種の技法を指摘している(孫継民 1994)。

翁牛特旗の白廟子山では多数の人面画とともに穴が刻まれている。この穴の配列は北斗七星を表現していると考えられている。赤峰市紅山区の紅山では同心円が刻まれている。松山区の陰河流域では多数の岩画

が発見されている。人面・人物画や動物画、渦文、同心円文など幾何文が刻まれている。

3. 従来の想定年代

白岔河流域の岩画について張松柏と劉志一は時間幅が大きく、上限年代は夏家店下層期であるとした(張松柏・劉志一 1984)。黒山頭の3箇所の岩画はそれぞれ年代が異なるとみられ、Ⅱ区の線刻動物画が古く、Ⅰ区とⅢ区の研磨技法による岩刻画は新しいという。このうちⅠ区とⅢ区はシカ画などから契丹との関係が考えられている。また、半拉山岩刻画については人物が並んでいる様相から夏家店上層期の所産であると考えられている(趙国棟 1992)。孫継民は克什克騰旗の岩画について編年している。白岔河岩画の舞踏画は新石器時代の土器の文様に類似があるとし、新石器時代中後期のものであるとした。大河隆人面画は紅山文化の玉器にみられる人面に類似すること、哥佬営子人面画は那斯台(董文義・韓仁信 1987)で出土した紅山文化の石偶に類似すること、山前村一組の人面画は趙宝溝文化の偶像に類似することなどからそれぞれの年代を付与している。土城子岩画は黄土採取時に地表下3～4mの黄土層中で発見されており、黄土層は比較的単純で、遺構・遺物は発見されていない。地表には多量の夏家店上層期の遺物が散布している。そのため夏家店下層期かそれ以前の所産であるとする。山前村人面画のある断崖頂部台地上には石積があり、興隆窪文化と紅山文化の遺物が多量に散布している。これらの遺構や遺物は人面画と関係があるとみられている。以上から、人面画の中には紅山諸文化と関連があるものがあるとされる。胴部に折線文がみられるシカ等動物画は夏家店上層期の青銅短剣の柄や青銅製タカ像の胴部に同様の折線文が認められるため、夏家店上層期の所産であるとされる。一方、砬子山は製作技法等から魏唐時代から遼代とみられている(孫継民 1994)。張松柏は紅山と三龍山の同心円文が線を刻んだ後反復して研磨する技法が用いられていることから新石器時代の所産であるとみている。白音長汗(内蒙

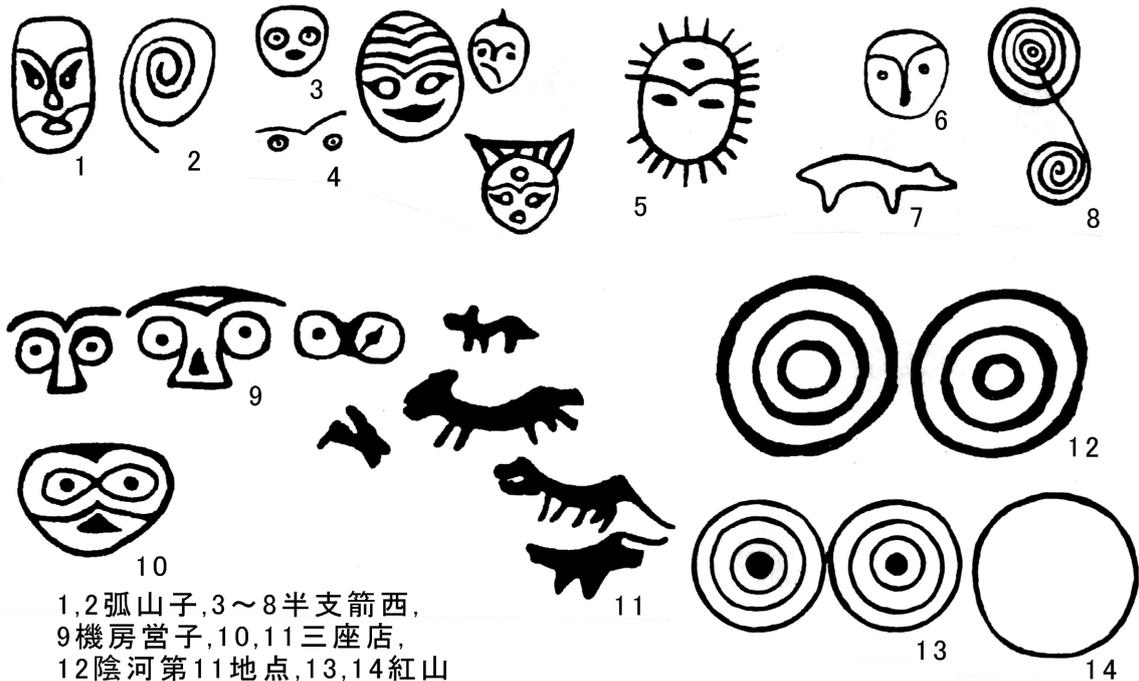


1～3查布嘎吐，
4～6床金溝A組，
7床金溝B組，
8～10哥佬營子，
11白廟子山

図 11 赤峰地区新石器時代の岩画 (1)

古自治区文物考古研究所 2004) で出土した石偶では 3つの穴で顔面を表現しており、類似するとする。哥佬營子の人面画と同心円文についても同様に刻磨技法で描かれ、3つの穴で人面を表現しているため、興隆窪文化期のものであるとする。土城子や懷陵前山につ

いては眼部に同心円が採用されていることから紅山や三龍山と共通するが、眉、鼻、口などの顔の各部分により写実的で区別される。そのため新石器時代の範疇を超えることはないようであるが、興隆窪文化期における異なる表現手法であるか、継続する時期であるか



1,2弧山子,3~8半支箭西,
9機房営子,10,11三座店,
12陰河第11地点,13,14紅山

図12 赤峰地区新石器時代の岩画(2)

は資料の増加を待たなければならないとする(張松柏 1998a)。また、白岔河流域の人物画について3組に分類し、それぞれ編年している。第1組には裕順広が該当する。裕順広では、他の岩画では白色顔料が用いられることが多い中、赤色顔料が用いられている。この岩画では龍が2体描かれており、三星他拉玉龍(賈鴻恩 1984)などとの比較から紅山文化期とする。また、第2組は永興村、山前村、胡角村などが該当し、白岔河流域で最も多い種類の岩画となる。騎乗場面が描かれていることから青銅器時代より古いものではなく、夏家店上層期の所産とする。第3組は広義、溝門が該当する。線磨技法で、遼代の壁画ほど写実的ではないことから下限年代は契丹建国初より遅いものではないとする(張松柏 1998b)。蓋山林と蓋志浩は西拉木倫河流域等の岩画について新石器時代としては土城子などの神仮面岩画が該当し、上限は興隆窪文化で下限は夏家店下層文化であるとしている。一方、西拉木倫河流域ではシカ画が多くみられシカ飼育の岩画もみられることやシカ画の胴部に描かれる折線文が夏家店上層期の青銅短剣の柄部などにもみられることから青銅器時代の所産であるとしている。遼代の岩画としては黒山頭の胴部に点文のあるシカ画などが想定されている。砧山子の岩画は遼代からモンゴル帝国時代までの年代が想定されている。また、英金河流域の岩画についても新石器時代と青銅器時代に編年している。新石器時代には渦文や一部の神仮面、重圏文、一部の

シャマン、一部の動物画が該当し、興隆窪文化の石偶や趙宝溝文化の土偶など対比されている。青銅器時代には仮面、宝冠をかぶりガウンを着た人物画、五角盾、胴部に折線文のある動物画が該当する。初頭郎(陰河第7地点)では仮面画が夏家店下層期の建物礎石に立石に描かれていたため、夏家店下層期のものであると判断された。五角盾はモンゴル高原やロシア領内で青銅器時代に編年されているとしている。胴部に折線文のある動物は、夏家店上層期の青銅製動物造形にできるので夏家店上層期に編年される。さらに跃进渠渠首の人物像は銅鈴鼓を持っているとされ、ガウンを着ており、夏家店上層期に編年している。遼代の岩画としては黒山頭と同様に胴部に点文のあるシカ画がみられる関家営子などが挙げられている(蓋山林・蓋志浩 2002)。

陰河流域の岩画について田広林は人面画と白音長汗や洪格力図で出土した人面像と比較し、相当数の興隆窪文化⁶⁾に属する人面画が含まれているとみている。ウマが描かれた岩画については青銅器時代のものとみている。また動物の体に折線文が描かれる特徴は夏家店上層期の動物造形でもみられるため、当該時期に属するものとみている。大きな耳のある人面画についても夏家店上層期にみられる芸術表現であるため、夏家店上層期より早い段階のものではないとする(田広林 2004)。白廟子山岩画について呉甲才は描かれた杯穴について約1万年前の配列の北斗七星である

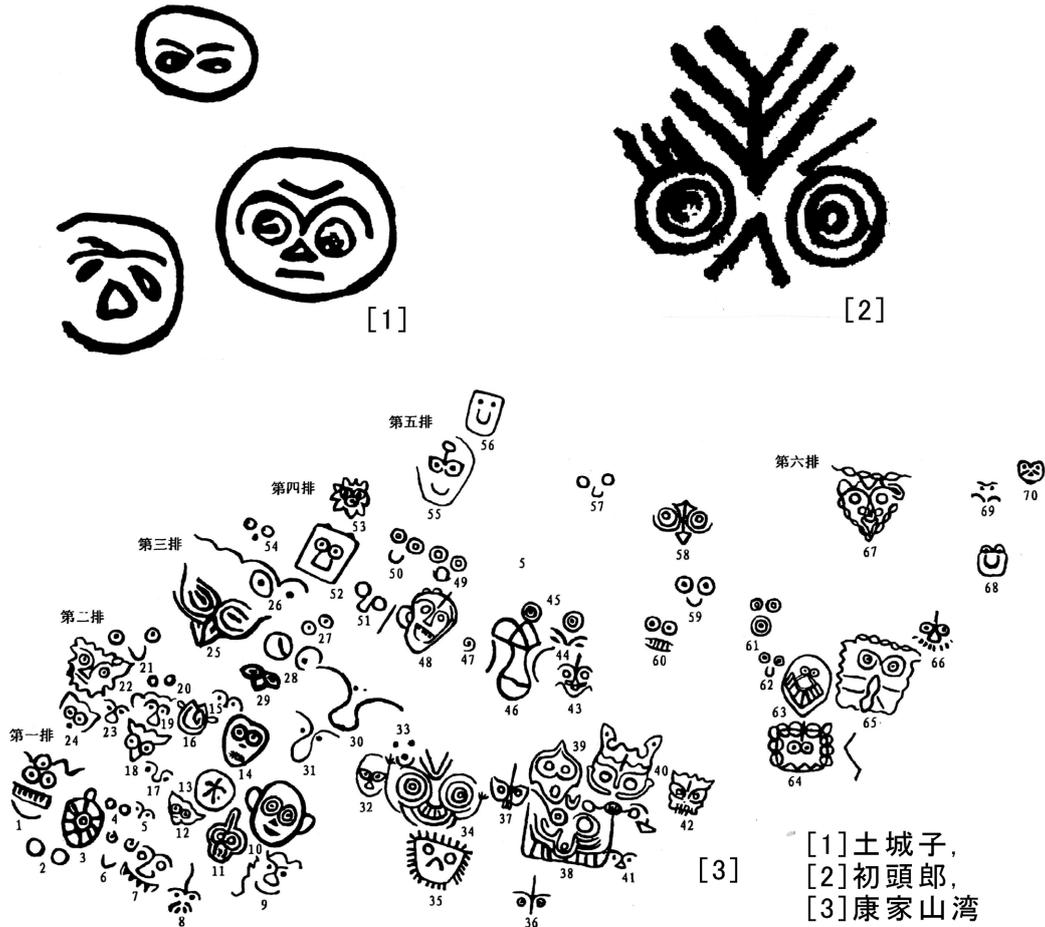


図 13 赤峰地区夏家店下層期の岩画

と判断したことから、新石器時代前期の所産であると
している（呉甲才 2007）。

これまで提示された見解を総合すると、新石器時代
に人面画が多く描かれ、一部の人面画は夏家店下層期
や夏家店上層期に比定されている。また、シカ等の動
物画は夏家店上層期を中心とする青銅器時代に描かれ
たものが多いということになる。

4. 赤峰地区岩画の編年

以上の年代に関する議論をもとに赤峰地区の岩画の
年代を考察する。これまで根拠として挙げられた中で、
確実性の高い岩画は、蓋山林らが指摘した夏家店下層
期の建物基礎の立石に描かれた初頭郎例である。初頭
郎では輪郭のない人面画で同心円による眼の表現に樹
木状の表現がみられる（図 13-〔2〕）。康家山湾では
樹木状の文様がある人面画がみられるため（図 13-
〔3〕-34）、康家山湾には夏家店下層期の資料が含ま
れるものとみられる。

なお、このような樹木状の表現は沿アムール地域

のサカチ・アリヤン 25 号岩などでみられる（図 8-1）。
サカチ・アリヤンの岩画の多くが帰属するヴォズネセ
ノフカ文化は夏家店下層期と併行する部分があるため
（古澤 2014b）、時期的には関連がある可能性がある
が、両地域を繋ぐ資料がないため、断定が困難である。
大塚和義は赤峰地区の白廟子山岩画を「アムールタイ
プ」と呼ぶ仮面の型式であるとして、サカチ・アリヤ
ンなどとの関係を想定しており、中間地域でも今後
発見されるという見通しを述べている（大塚 2005）。
筆者は後述のとおり白廟子山の年代を夏家店下層期よ
り古く考えているため、ヴォズネセノフカ文化との併
行関係上、直接連結させるのは困難であるとする。

次に年代の確実性が高い岩画は、蓋山林らが指摘し
た黄土の掘削により発見された土城子岩画（図 13-
〔1〕）である。地表には夏家店上層期の遺物が散布し
ており、黄土は無遺物であったことから、夏家店上層
期以前の時期が想定される。土城子の人面画と類似し
た人面画は康家山湾（図 13-〔3〕）でもみられる。

確実性には不安が残るが、遺物に表現された文様と

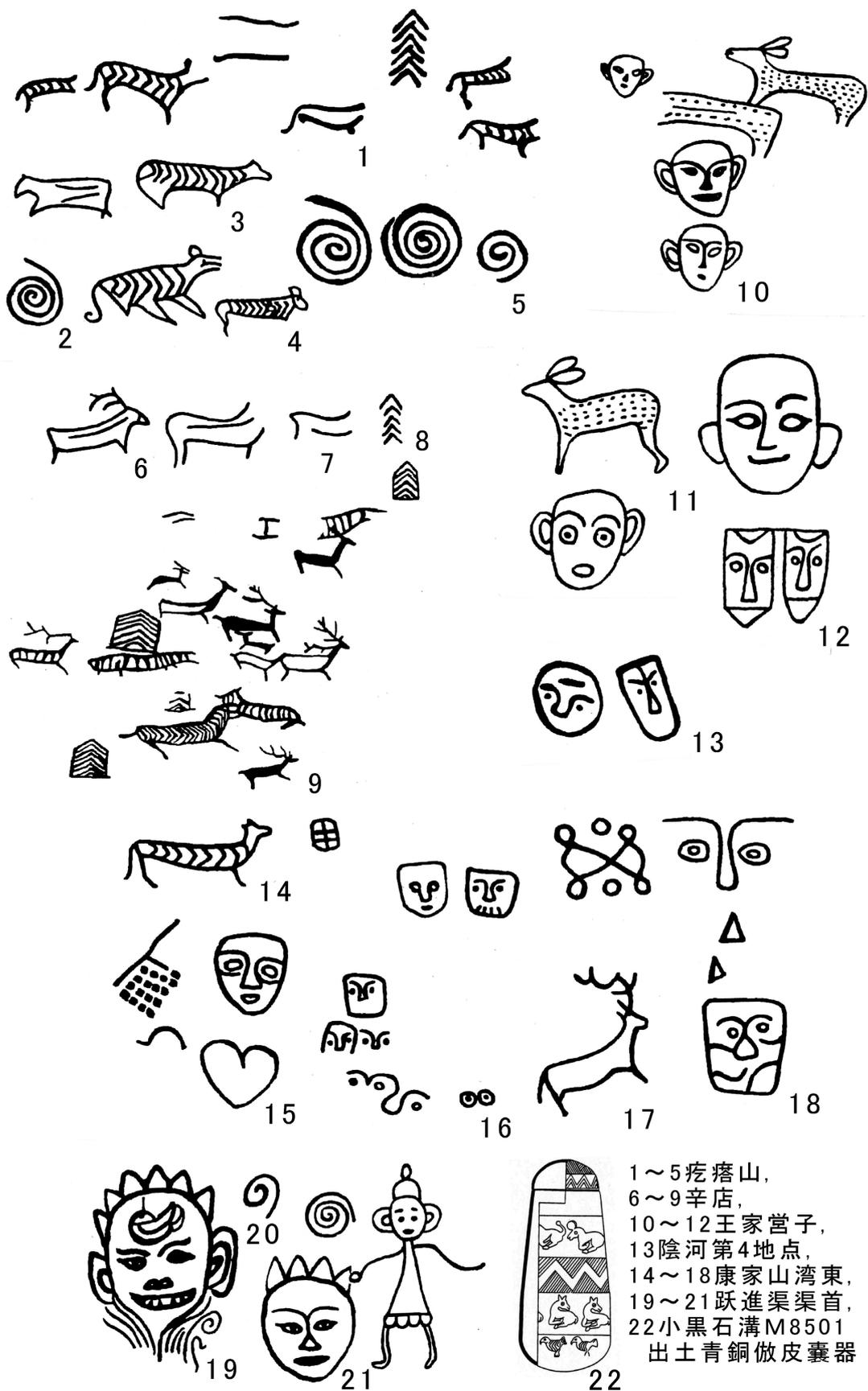
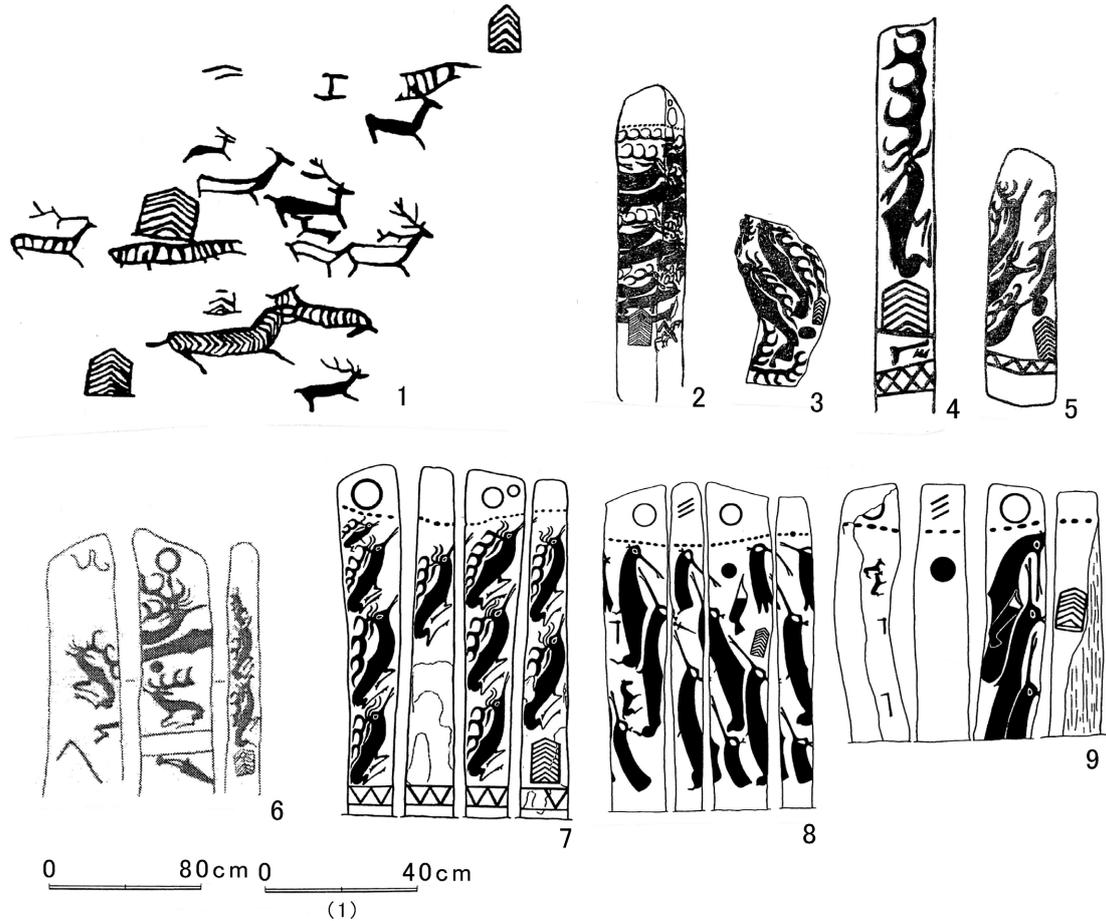


図14 赤峰地区夏家店上層期の岩画

1~5 疙瘩山,
 6~9 辛店,
 10~12 王家营子,
 13 陰河第4地点,
 14~18 康家山湾東,
 19~21 跃进渠渠首,
 22 小黑石溝M8501
 出土青銅倣皮囊器



1辛店, 2バヤンツァガーヌイ・フンディー, 3バヤンツァガーヌイ・アダーグ6号, 4デルゲル・ムルニー・フンディー3号, 5シャタル・チョロー6号, 6フヴスグルアイマグ・ガルトスムⅢ-4号, 7ダストウイン・ゴル2号, 8ポドンチーン・ゴル11号, 9ポドンチーン・ゴル12号

図 15 赤峰地区岩画とモンゴル高原鹿石の比較

同様の文様が岩画にみられる場合、同時期と看做す論理も上でみたように多用される。このうち、胴部に折線文のみられる動物画は、孫継民、蓋山林、田広林が主張するように夏家店上層期に位置づけられる小黒石溝 8501 号墓（塔拉等 2009）出土青銅製倣皮囊形器の鴨形文の胴部を折線で充填する事例（図 14-22）などから、夏家店上層期に位置づけられるものと考えられる。胴部に折線文のある動物画は疙瘩山（池家営子）（陰河第 3 地点）（図 14-1, 3, 4）、康家山湾東（図 14-14）、辛店（関家営子満族郷）（陰河第 9 地点）（図 14-9）等で確認される。また、折線文は疙瘩山（図 14-1）、辛店（図 14-9）で確認される。このうち康家山湾東では眼があり、眉と鼻を繋げた人面画がみられる。このような人面画は夏家店下層期の初頭郎例などとは区分されるので、夏家店上層期の人面画とすることができるものと考えられる。なお、同様の人面画は王家営子（図 14-12）や陰河第 4 地点第 2 組（図 14-13）でも確認される。辛店ではシカ画が多くみ

られるため、シカ画の多くを青銅器時代に位置づける従来の編年観は正しいものと考えられる。

さて、辛店では胴部を折線で充填した動物画とともに五角形を折線で充填した文様のみられる（図 15-1）。これは、蓋山林が指摘したとおりモンゴル高原やシベリアでみられる文様である。特に、モンゴル高原の鹿石にはこの文様が多くみられ（図 15-2~9）、盾（防牌）であるとみられている。鹿石の年代についてはさまざまな見解があり、B. B. ヴォルコフは写実的なシカ画から様式化されたシカ画に変遷するとしたが（Волков 1981）、Э. А. ノヴゴロドヴァや高濱秀は反対に写実的なシカ画のほうが新しいとみている（노브고라도마 1995、高濱 1999）。ノヴゴロドヴァはモンゴル高原の鹿石をカラスク時代のものとみて、3 類型に分類した。また、抄道溝出土短剣や白浮出土短剣と比較し、商末西周前期と併行関係にあることを述べた（노브고라도마 1995）。畠山楨は短剣の表現や鹿石を再利用して造られたクルガンの年代などから

表 2 赤峰地区岩画の編年

時期	岩画						渦文	同心円文
	阿魯科爾沁旗	扎魯特旗	巴林右旗	克什克騰旗	翁牛特旗	赤峰市区		
新石器時代 (夏家店下層期以前)		查布嘎吐	懷陵前山,床金溝	哥佬營子(一部)	白廟子山	孤山子,半支箭西,機房營子,三座店,第11地点,紅山	孤山子,半支箭西	哥佬營子,紅山,半支箭西,陰河第11地点
夏家店下層期				土城子		初頭郎,康家山湾(一部)		康家山湾
夏家店上層期	半拉山		東馬鬃山	永興,板石房,広義,双合,烏蘭坝底,大河隆,胡角吐,溝門,黒山頭(一部),裕順広村		平房,疙瘩山,第4地点,第2組(一部),半支箭東(一部),康家山湾東,跃進渠渠首,辛店,王家營子	疙瘩山,跃進渠渠首	
遷代を前後する時期		查布嘎吐	磴磴山,床金溝	黒山頭,砧山子		関家營子		

商代後期から春秋時期、紀元前 13 世紀を遡る時期から紀元前 7-6 世紀とみた(崑山 1992)。近年、潘玲は鹿石に描かれる短剣、弓形器、戈、劍鞘、卷曲動物文とモチーフの元となった出土遺物とを対比している。古い段階のものはやはり抄道溝などと対比されており(図 15-6)、モンゴル高原の鹿石が商代後期から戦国時代にかけて形成・変遷したことを示している(潘玲 2008)。潘玲の編年案に基づくと折線充填五角形(盾)の表現は商末から戦国中期にいたるモンゴル高原の鹿石に継続してみられるということとなる。鹿石の上限年代についてはノヴゴロドヴァヤや潘玲が注目した抄道溝や白浮の資料の年代が問題となるが、筆者は青銅刀の編年から抄道溝は商代後期前半、白浮は西周前期に位置づけたことがある(古澤 2013)。商代後期の赤峰地区はおおむね魏營子類型に該当するので、辛店などでみられる折線充填五角形は魏營子類型まで遡る可能性もあるものの、おおむね夏家店上層期に併行するという従来の見解はモンゴル高原の鹿石との対比からも首肯される。魏營子類型に先行する夏家店下層期にまで遡ることはないことをここで確認した。このような赤峰地区岩刻画とモンゴル高原の鹿石との類似は夏家店上層文化の青銅器にみられる草原地帯との関係(中村 2007)と連動するものであると考えられる。

跃進渠渠首(陰河第 8 地点)にみられる人物画(図 14-21)は鈴鼓を持っているため夏家店上層期に該当するものと蓋山林らにより推定されている。この人物画と同じく跃進渠渠首で確認される人面画は大きく耳が表現されているのが特徴であるが(図 14-19)、そのような人面画は平房(陰河第 2 地点)、王家營子(図 14-10, 11)でも確認される。

以上の状況から、人面画に関しては、樹木状の文様がある初頭郎や康家山湾の一部などが夏家店下層期に該当し、眉と鼻を繋げた人面画がある康家山湾東や陰河第 4 地点第 2 組の一部、大きな耳が表現される平房、陰河第 8 地点、王家營子などの人面画は夏家店上層期に該当するものと整理される。そのように考え

ると、これらの特徴を持たない多くの人面画(図 11、図 12)は夏家店下層期を遡る新石器時代の所産とみることが最も妥当性が高いものと考えられる。但し、多くの研究者が主張するような人面画の多くを興隆窪文化期まで遡らせる考え方の当否については筆者は判断することができない。以上の編年案を整理したものが表 2 である。

5. 渦文・同心円文のある岩画の年代

赤峰地区でみられる岩画のうち、芝草里でみられた渦文および同心円文がみられる岩画は次のとおりである。哥佬營子では、動物画、人面画とともに同心円文がみられる(図 11-8~10)。また人面画の眼を同心円で表現している。紅山では同心円文が 2 個並んで描かれており(図 12-13)、このほか一重の円文もみられる。三龍山では 2 個の同心円の周囲を横位の 8 字状に囲んだ図像が描かれている。陰河第 11 地点では 2 個の同心円がみられる。ただし、赤峰地区では顔の輪郭を形成しない人面画もあり(王曉琨・張文静 2014)、紅山、三龍山、陰河第 11 点などの事例は人面の眼部分である可能性がある。なお、眼部分を同心円で表現する人面画は白廟子山などで確認されている。孤山子では人面画(図 12-1)とやや離れた地点で渦文(図 12-2)が確認されている。半支箭西では人面画とともに同心円文と渦文の組み合わさった文様(図 12-8)が確認されている。康家山湾では多数の人面画が確認されているが、眼部分を同心円で表現するものが多い(図 13-[3])。疙瘩山では胴部に折線文が描かれた動物画とともに渦文(図 14-2, 5)が認められる。跃進渠渠首では毛髪を表現した人面画や鈴鼓を持つ人物画と渦文が組み合わさった図がみられる(図 14-20, 21)。赤峰地区の渦文は孤山子、半支箭西などで共伴した人面画の特徴から新石器時代(夏家店下層期以前)に位置づけられ、疙瘩山、跃進渠渠首では共伴した動物画や人物画の特徴から夏家店上層期に位置づけられるものと考えられる。従って赤峰地区では新石



図 16 盤亀台岩刻画 (面刻技法)

器時代と夏家店上層期に渦文がみられることとなる。

同心円のみられる哥佬營子、紅山、半支箭西などでは共伴した人面画の特徴から新石器時代（夏家店下層期以前）に編年され、康家山湾の同心円は共伴した人面画の特徴から夏家店下層期に位置づけられるもの

と考えられる。従って赤峰地区では新石器時代から夏家店下層期にかけて同心円文がみられることとなる。

渦文と同心円が共伴した事例としては半支箭西例が挙げられ、新石器時代の所産とみられる人面画とともに描かれている。

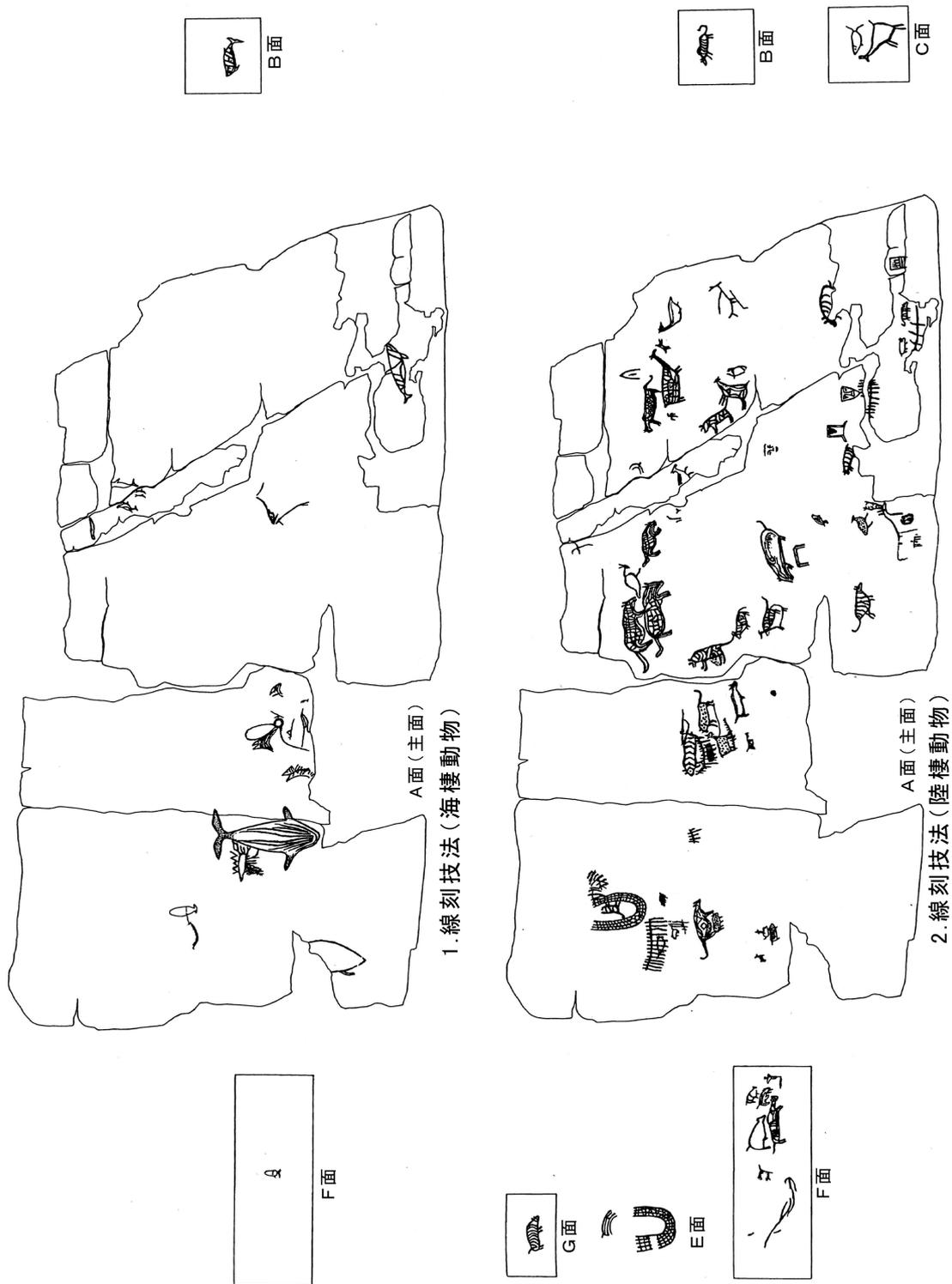


図 17 盤亀台岩刻画（線刻技法）

VII. 韓半島南部の岩刻画

1. 岩刻画の所在

韓半島南部では、慶尚北道を中心に岩刻画が確認されている。これまで確認されている岩刻画は慶尚北

道榮州市可興洞（任世権 1999）、安東市水谷里（任世権 1999）、浦項市七浦里崑崙山、ノンバルジェ（농발재）、新興里オジュムバウィ（오죽바위）、七浦里（推定）支石墓（韓馨徹 1996、李夏雨 2011b）、浦項市仁屍洞支石墓（李健茂 他 1985）、浦項市石里



図 18 川前里岩刻画 (面刻技法・線刻技法)

(李夏雨 2011b)、浦項市大蓮里 (李夏雨 2011b)、永川市甫城里 (任世權 1999)、慶州市石長洞金丈台 (韓馨徹 1996、任世權 1999)、慶州市安心里・上辛里 (韓馨徹 1996、任世權 1999)、蔚山広域市蔚州郡

川前里 (文明大 1973、黄寿永・文明大 1984、全虎兌 1996)、蔚州郡大谷里盤龜台 (文明大 1973、黄寿永・文明大 1984、全虎兌 1996)、大邱広域市辰泉洞立石 (李白圭・吳東昱 2000)、大邱広域市川内里

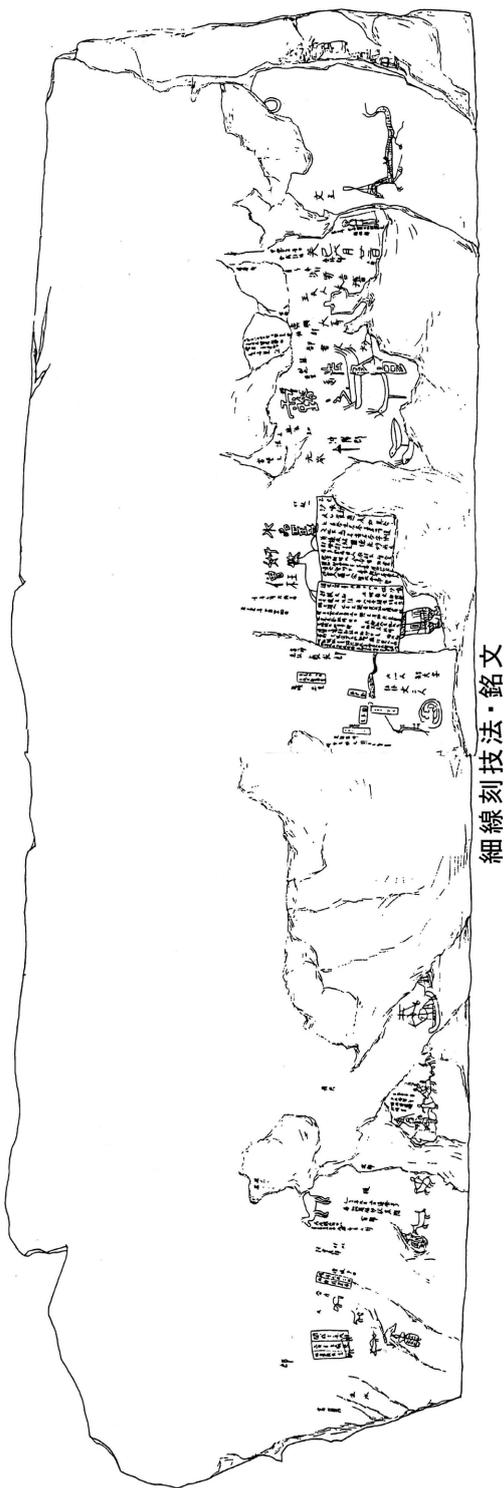


図 19 川前里岩刻画（細線刻技法・銘文）

支石墓（李夏雨 2011a）、慶尚北道高靈郡良田里（李殷昌 1971、申鍾煥 他 2008）、高靈郡安和里（申鍾煥 他 2008）、高靈郡池山洞 30 号墳石材（박승규 他 1998）、高靈郡鳳坪里（大伽耶博物館 2008、李夏雨 2011b）、慶尚南道陝川郡苧浦里支石墓（釜山大学

校博物館 1987）、宜寧郡馬双里出土岩刻石（柳昌煥 他 2012）、咸安郡道項里支石墓（崔憲燮 1992、昌原文化財研究所 1996）、密陽市新安支石墓（이영주・김병섭・박소은 2007）、密陽市サルレ(살내)支石墓（金炳燮 2003）、釜山広域市福泉洞 79 号墳（宋桂鉉 他 1995）、慶尚南道泗川市本村里出土銅劍岩刻石（趙榮濟 他 2011）、南海郡良阿里（黃龍渾 1975）、全羅北道南原市大谷里（宋華燮 1993b）、全羅南道麗水市五林洞支石墓（李栄文・鄭基鎮 1992）、濟州特別自治道濟州市光令里（김종찬 2013）などが挙げられる。慶尚北道に多く分布しているのが特徴である。

2. 韓半島南部岩刻画の類型

韓半島南部の岩刻画はいくつかの類型に分類される。ここでは、動物画を含む岩刻画、鳳坪里岩刻画、防牌形岩刻画、支石墓や立石に描かれる岩刻画、その他の岩刻画、三国時代古墳岩刻画に分類する。また、動物画を含む岩刻画として大谷里盤龜台と川前里が挙げられるが、両者は異なる部分も多いため、ここではそれぞれ説明する。

(1) 大谷里盤龜台岩刻画

200 点あまりの人物画、動物画、各種生活場面が描かれている。動物には海棲動物と陸生動物がみられ、海棲動物はクジラ、オットセイ、海亀など、陸生動物にはシカ、トラ、イノシシ、イヌなどがみられる。人物画は人面のみ描かれる場合と全身像、舟にのった人などがみられる。道具画は舟、垣根、網、鋸、弩のような物件などがみられる。表現方法は対象の内部を全て敲打した面刻技法（図 16）と輪郭のみを刻んだ線刻技法（図 17）がみられる。

(2) 川前里岩刻画

盤龜台岩刻画の前を流れる大谷川の中流にあり、盤龜台とは約 2km 離れている。シカやイヌなどの動物、人面、同心円文・渦文・菱文などの幾何学文、人の行列、舟、想像上の動物などの画像のほか新羅時代の銘文もみられる。動物と人は大部分面刻技法（図 18-1）、幾何学文は線刻研磨技法（図 18-2）、騎馬行列、舟、想像上の動物は細線刻技法（図 19）で描かれる。

(3) 鳳坪里岩刻画

鳳坪里岩刻画は 2008 年に大伽耶博物館学芸研究チームによる地表調査で発見された岩刻画である。岩面右側に磨製石劍形岩刻画 3 点程度あり、周辺に獸（イノシシ？）とみられる岩刻画があり、石劍で獸を突き

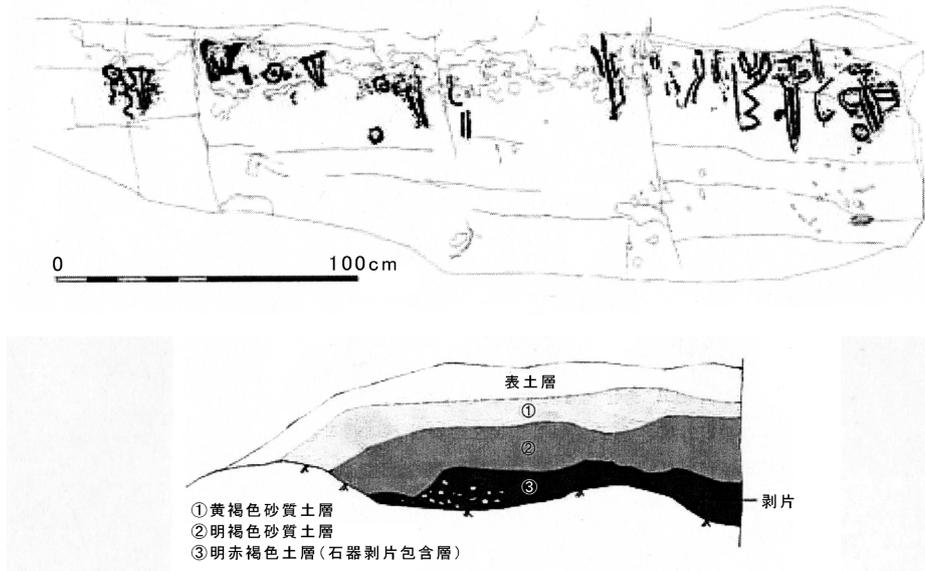


図 20 鳳坪里岩刻画

刺しているようにもみえるという。その石剣の左側に鋸歯文がみられる。岩面左側には琵琶形銅矛形岩刻画がある。中央の性穴を中心に一重の円形岩刻画 5～6 点がみられる。そのほか馬蹄形とみることもできる岩刻画 3～4 点と 20 箇所程度の刻んだ痕跡がみられる。また、南側に 10m 程度離れた地点でも女性性器形岩刻画 1 点が確認された(図 20)。岩面前面の腐葉土と堆積土を除去した結果、次のような層位であった。

腐葉土；表土下 15cm 程度

第 1 層；厚さ 20cm 程度。黄褐色砂質土。近代砂防事業以前の堆積土。

第 2 層；厚さ 20cm 程度。少量の岩盤片を包含する明褐色砂質土。

第 3 層（最下層）；厚さ 15cm 程度。比較的粒子が大きい多量の岩盤片を包含する明赤褐色土。岩刻画が刻まれた岩面を一部覆っている。石器剥片を包含する青銅器時代文化層。

この層序により岩刻画は第 3 層の堆積より早いか同時期に製作されたものと考えられている。また、岩刻画から南に約 500m の位置に青銅器時代の石器製作遺跡があり、石器製作集団が岩刻画を残した可能性についても言及されている(大伽耶博物館 2008)。李夏雨は磨製石剣とされた一部の岩刻画の柄部形態から、銅剣であると判断している。製作技法としては敲打後に研磨する技法であるとする(李夏雨 2011b)。

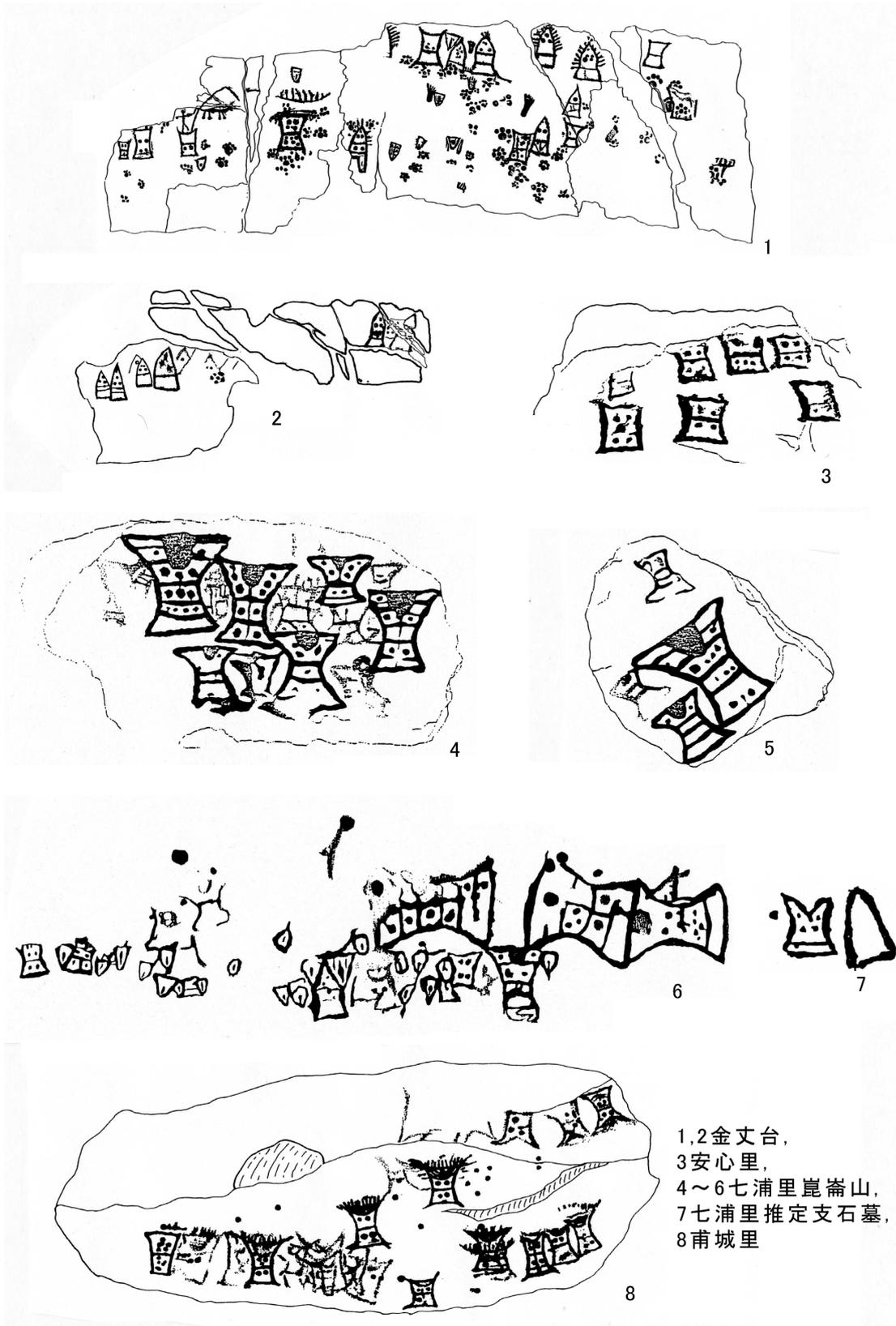
(4) 防牌形岩刻画

防牌形岩刻画は剣把形岩刻画(宋華燮 1994、韓馨

徹 1996)、牌形岩刻画(李相吉 1996)、神体文岩刻画(申大坤 1998)、神像岩刻画(任世権 1999)、長方形幾何文(李炯佑 2004)、七浦里型岩刻画(李夏雨 2011b)などとも呼称される。可興洞(図 22-6)、七浦里崑崙山(図 21-4～6)、ノンバルジェ、新興里オジュムバウイ、七浦里(推定)支石墓(図 21-7)、甫城里(図 21-8)、石長洞金丈台(図 21-1, 2)、安心里・上辛里(図 21-3)、良田里(図 22-1)、安和里(図 22-2, 3)、池山洞 30 号墳(図 22-4)、南原大谷里(図 22-5)などで確認される。防牌のように両側面が湾曲するものが多く、上部は直線になるものと、V 字に屈曲するものがある。内部を横線で区画するものが多く、穴を持つものも多い。上面や側面に羽毛状の短線を持つものと持たないものがある。なお、5 世紀中葉に編年される池山洞 30 号墳では主石室蓋石に防牌形岩刻画、下部石槨蓋石に人物像岩刻画が刻まれているが、これは、本来別の場所にあった岩刻画岩を古墳石材として利用した事例である。

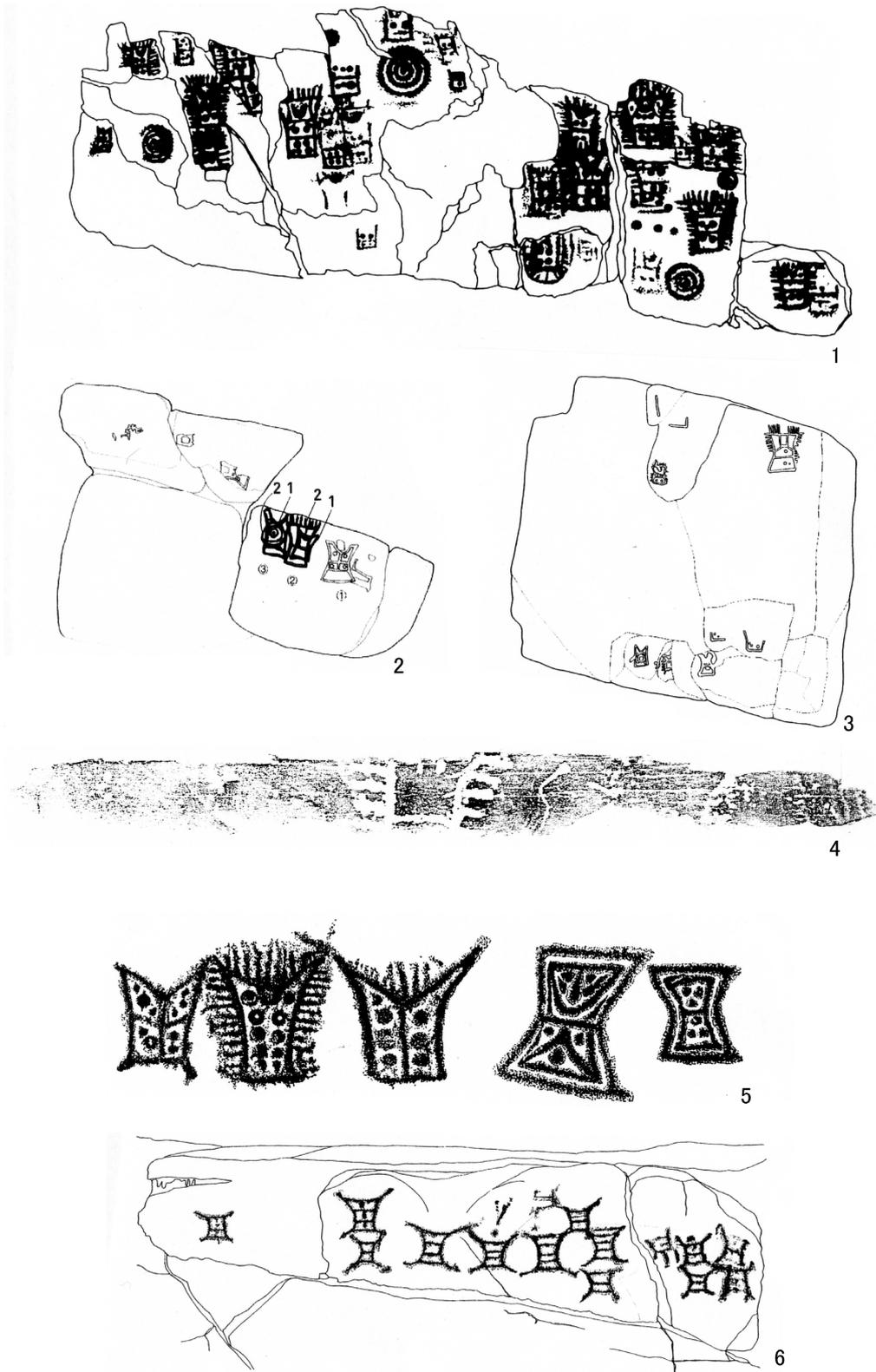
(5) その他の岩刻画

水谷里ではヒトの足跡文、馬蹄文、鳥、ユッパン(吳岬)⁷⁾、穴などが線敲打技法で製作されている(図 23)。石里では楕円と線がみられる岩刻画が存在した(李夏雨 2011b)。良阿里では不整形の幾何学的文様が線刻技法で製作されている(任世権 1999)。光令里では樹木状の文様と穴が敲打・研磨・沈線で製作されている(김종찬 2013)。



1,2金文台,
3安心里,
4~6七浦里崑崙山,
7七浦里推定支石墓,
8甫城里

图 21 防牌形岩刻画 (1)



1 良田洞, 2, 3 安和里, 4 池山洞 30 号墳, 5 南原大谷里, 6 可興洞

图 22 防牌形岩刻画 (2)

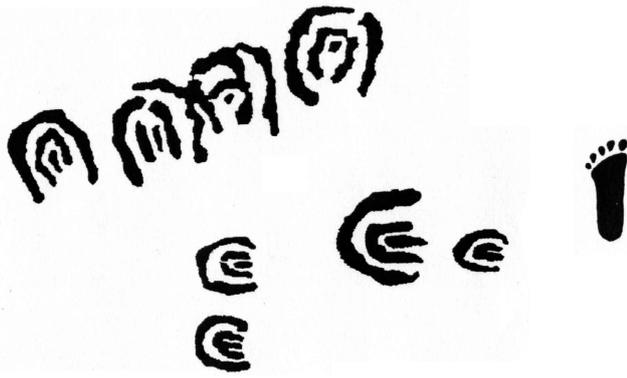


図 23 水谷里岩刻画

(6) 支石墓・立石等岩刻画

仁尻里 16 号支石墓では石剣と石鏃とみられる岩刻画が描かれている (図 24-1)。辰泉洞では基壇の中に立てられた不定形の花崗岩立石の北面に 6 箇所の性穴、西面に 4 個の渦文がみられる (図 24-2)。川内里支石墓では上石に直径 6.8 ~ 8.2cm の 3 重または 4 重の同心円が 6 箇所みられる (図 24-4)。苧浦里 E 地区 4 号支石墓では上石に多数の性穴とともに円文が刻まれている (図 24-3)。馬双里 1 号墓は半地下式の積石土壙墓であるが、積石の北西隅で、石剣と推定される図像が敲打により描かれた石が出土した (図 25-3)。道項里では 4 号支石墓上石に性穴と陰刻線がみられ (図 24-5)、4 号支石墓上石に同心円文 7 箇所と多数の性穴、矢 (?)、陰刻線がみられる (図 24-6)。新安では II 地区 1 号支石墓と 4 号支石墓で岩刻画が認められる。II 地区 1 号支石墓は墓域支石墓であるが、墓域を構成する岩に女性性器 1 点と人物像が刻まれている (図 25-1)。II 地区 4 号支石墓も墓域支石墓であるが、墓域西側中央部の割石西面に同心円文が刻まれている (図 25-2)。サルレ 1 号祭壇支石墓では、祭壇を構成する石に岩刻画がみられ、石剣像 2 点と女性性器像 1 点が刻まれた石 1 点 (図 25-4) と何を表現したのかわからない陰刻線のある石 1 点 (図 25-5) が確認されている。五林洞 5 号支石墓では、石剣、座っている人物、立っている人物、槍のような道具が刺さった動物画などがみられる (図 25-6)。

(7) 画像が刻まれた石 (刻画石)

本村里 4 号住居址では再加工琵琶形銅剣像が刻まれた石 (図 25-8) と、モチーフ不明像の刻まれた石 (図 25-7) が出土している。

(8) 三国時代古墳岩刻画

大蓮里では人物像の描かれた岩刻画がみられるが、

周辺に多く所在する盗掘された三国時代古墳の石材であったものとみられる (図 26-2)。

福泉洞 79 号墳は竪穴式石槨墓で、西障壁北側下端石の表面に舟とその上に渦文があり、船首にはモチーフ不明画があり、船尾には座って祈祷しているとみられる人物が描かれている。船首の先には同心円文が描かれる (図 26-1)。

3. 従来 of 想定年代

韓半島南部岩刻画の年代については非常に多くの見解が提示されている。朴廷根はそれぞれの見解を表に整理しており、参考となる (朴廷根 2000)。本稿ではその根拠も含めて整理する。

(1) 大谷里盤亀台の想定年代

文明大と黄寿永は、盤亀台岩刻画に全面彫技法と線彫技法があることを示し、重複 (切り合い) 関係から全面彫技法が古く、線彫技法が新しくなり、様式化が進展するとした。線彫技法の中には動物の内部器官を表現したのものが (透過技法)、北歐や沿アムールにも同様の岩刻画がみられ、それらの年代は新石器時代中期とされたことから、線彫技法は上限年代を新石器時代中期まで遡るとし、先行する全面彫技法の上限は新石器時代中期以前と考えた。従って、盤亀台岩刻画の年代について新石器時代中期以前から新石器時代末期を経て、青銅器時代前期までの時間幅を持つと考察した (文明大 1973、黄寿永・文明大 1984)。

金元龍は当初、青銅器に現われた文様や性格と類似することから青銅器時代の所産であるとみていたが (金元龍 1973)、後に更に年代を絞り込んだ。盤亀台の岩刻画を大きく 4 期に分期し、その最も古い段階であると想定した B 区では多人数が乗る外洋船と捕鯨用の弩がみられ、弩の中国での使用が紀元前 300 年頃であることから、この頃を上限年代とし、下限は三国時代以前とした (金元龍 1980)。

孫寶基はシカ画などの一部の岩刻画は後期旧石器時代末に製作されたものであると述べた (孫寶基 1973)。

黄龍渾は岩刻画の製作技術に着目し、韓半島南部の岩刻画に年代を与えた。盤亀台では敲打技法 (第 I 技法) により製作されており、第 I 技法は新石器時代の技法であるとした。また盤亀台の一部の動物画は沈線技法 (第 II 技法) により製作されていることから青銅器時代の所産であるとした (黄龍渾 1975)。

江坂輝彌は盤亀台の線刻獣類の絵画の一部は晩期旧石器時代にまで遡るものがあるのではないかと述べ

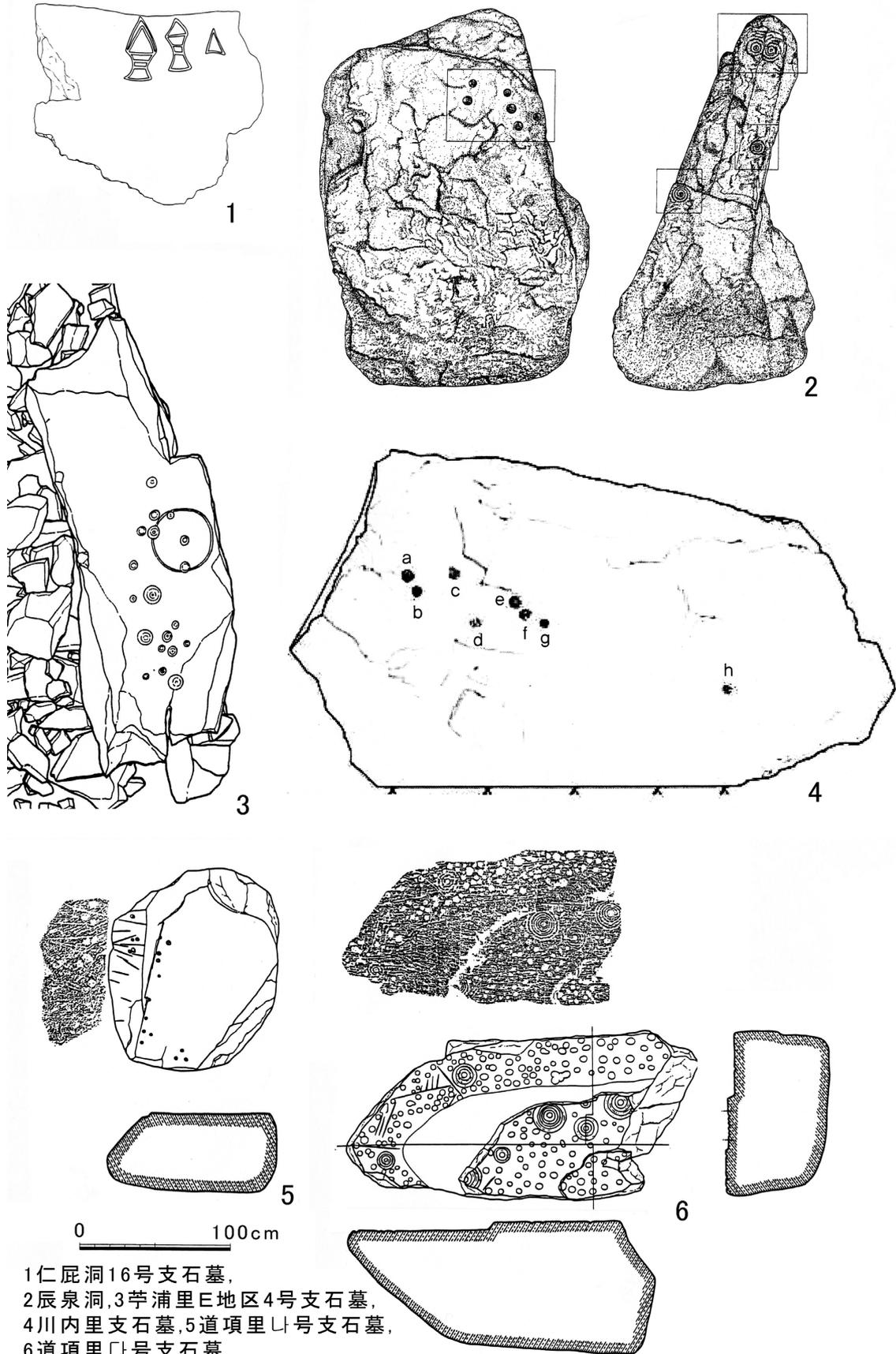
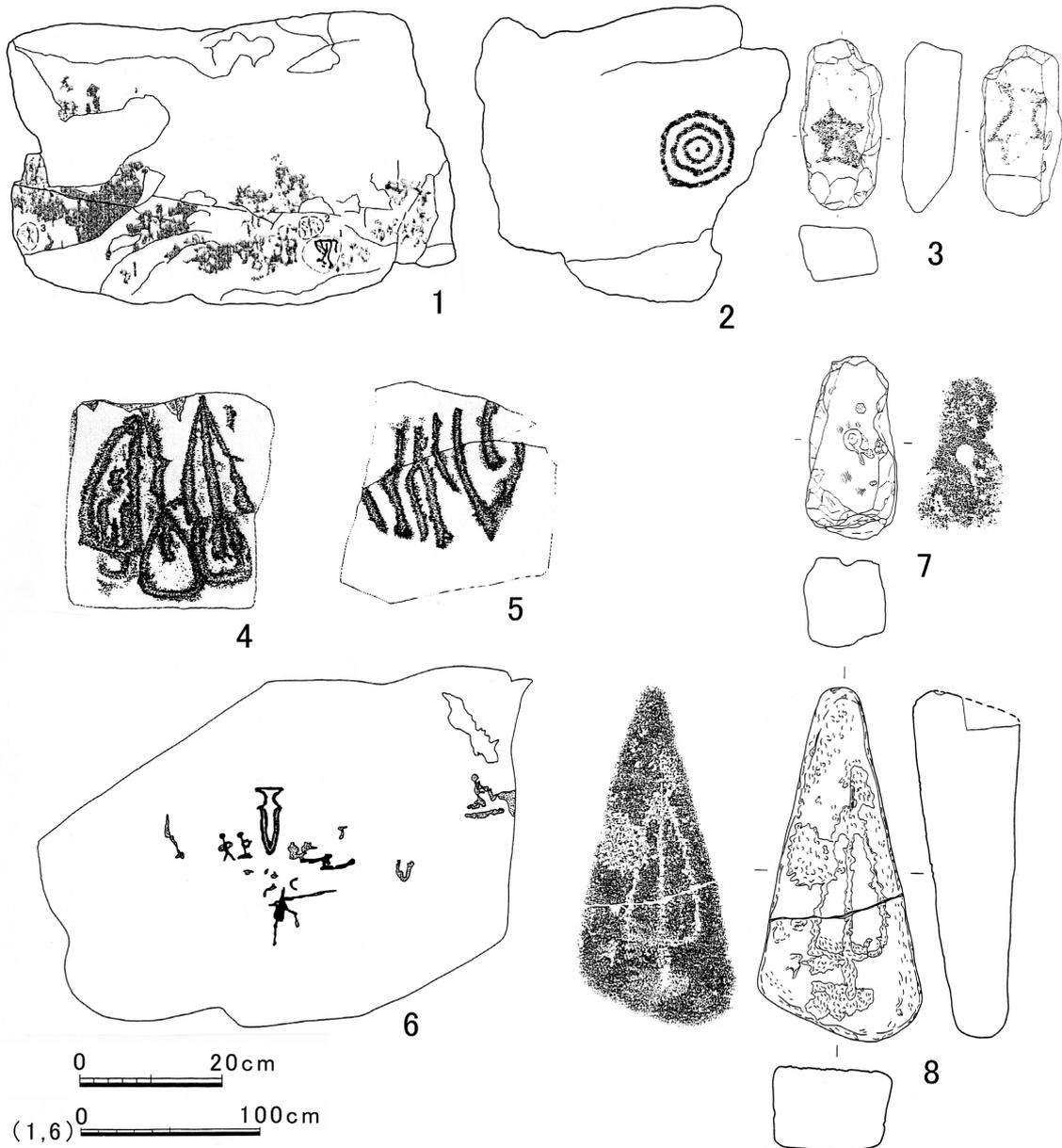


图 24 支石墓岩刻画 (1)



1新安Ⅱ地区1号支石墓,2新安Ⅱ地区4号支石墓,3馬双里1号墓,
4,5살내1号祭壇支石墓,6五林洞5号墓,7,8本村里나号住居址出土刻画石

図25 支石墓岩刻画(2)・刻画石

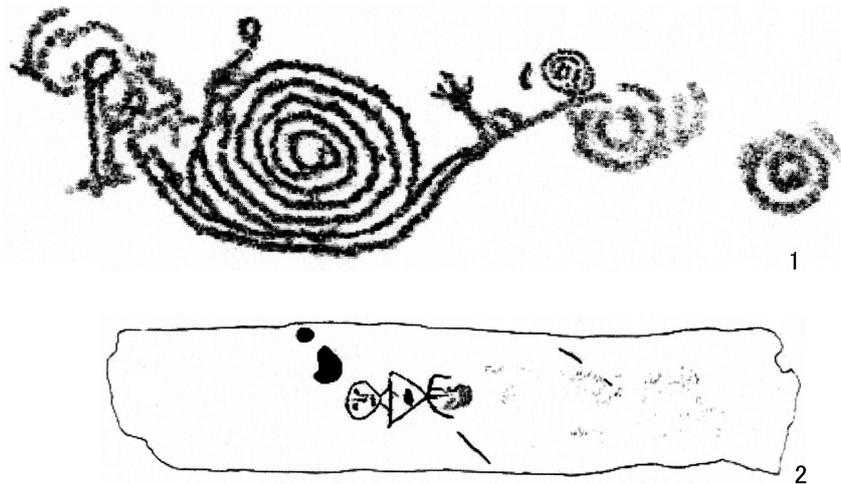
た(江坂1982)。

정동찬はクジラ崇拜信仰岩刻画は新石器時代後期以前であると述べた(정동찬1988)。

金用玕は、動物、漁撈、鳥狩獵、人々が踊る姿は新石器時代のものとしながら、舟に乗りクジラを獲っている画像については、クジラ漁を新石器時代に行っていたかは疑問であるとして、新石器時代のものとするのは困難であるとした(金用玕1990)。

張明洙は岩刻画製作技法により編年を行った。敲打技法は面敲打技法と線敲打技法に分類される。研磨

技法は面研磨技法、線研磨技法、隆起研磨技法に分類される。沈線技法には線沈線技法がみられる。そして面敲打技法を青銅器時代Ⅰ期、線敲打技法を青銅器時代Ⅱ期、面研磨技法を青銅器時代後期以降、狭く浅い線研磨技法を初期鉄器時代Ⅰ期、広く浅い線研磨技法を初期鉄器時代Ⅱ期、広く深い線研磨技法を初期鉄器時代Ⅲ期、隆起研磨技法を初期鉄器時代Ⅳ期、線沈線技法を古代に編年している。このうち盤龜台では面敲打技法と線敲打技法がみられるため青銅器時代Ⅰ期であるとする(張明洙1996)。



1 福泉洞79号墳, 2 大蓮里

図 26 三国時代古墳岩刻画

金貞培は盤亀台岩刻画に馬に乗った人や船の中に鋸があることから青銅器時代の所産であるとし、各種動物が描かれているのは、狩猟・漁撈経済段階を示しているのではなく、蔚山地方の特殊な生業関係を反映していると述べた（金貞培 1997）。

任世権は、文明大らと同様に面刻動物画を線刻動物画が破壊している点を指摘し、先後関係にあることを述べているが、一方では、面刻画は一定の区域に集中して製作されている一方、線刻画はできるだけ、面刻画と重複を避けて、製作されている点、同じ動物画が描かれる点などから、製作時期は異なるが、ほぼ同一の文化的背景を持った集団が製作したものと指摘しており、その時間的間隔は大きくないものと考えた（任世権 1999）。

金権九は、金元龍の見解を支持し、青銅器時代の支石墓にも岩刻画があり、岩刻画伝統がみられる点、東西里剣把形銅器（池健吉 1978）にある「手」文様、南城里剣把形銅器（韓炳三・李健茂 1977）にみられるシカ文様、伝慶州肩甲形銅器（岡内 1983）にみられるトラとシカ文様、伝大田出土農耕文青銅器（韓炳三 1971）にみられる鳥、人などの文様が盤亀台岩刻画の線刻方式と類似している点などを挙げ、青銅器時代後期から初期鉄器時代を中心年代とみている（金権九 1999）。

黄相一・尹順玉は古蔚山湾の海水面変動から内湾捕鯨が可能となった新石器時代に該当する 6000～5000 年 B.P. 頃に製作が開始されたと述べている（黄相一・尹順玉 2000）。

이상목は遺跡と海水面変動による海岸線の距離、岩刻画に示される道具と狩猟技術、海洋漁撈に基盤を置く生業活動などを根拠に上限を新石器時代とみた（이상목 2004）。

河仁秀は東三洞出土シカ線刻文土器や、東三洞等で多量に出土するクジラ類骨から想定される新石器時代の捕鯨を根拠に、盤亀台岩刻画の上限年代を新石器時代に遡上させている（河仁秀 2007、2012）。

李夏雨は盤亀台岩刻画の表現物について属性により類型化した後、重複関係から先後関係を求めた。その結果、第 1 製作層は捕鯨舟やクジラなどで構成され、第 2 製作層は腰部分が圧縮された動物表現などで構成され、第 3 製作層はヤギ、シカ、イノシシ、オオカミなど陸地動物で構成され、第 4 製作層は盤亀台を代表するクジラなどで構成され、第 5 製作層は線刻でトラやヒョウなどの動物や腹が膨らんだイノシシ、トラ、シカ、下に向けたクジラなどで構成され、第 1 製作層から第 5 製作層へと変遷したとみる。時期は新石器時代末期から青銅器時代中期にかけて製作されたとする（李夏雨 2011b）。

姜奉遠は河仁秀の論拠に加え、金元龍により弩と解釈された岩刻画について、捕鯨時に使用される浮具である可能性を述べ、やはり新石器時代まで年代を遡上させている（姜奉遠 2012）。

(2) 川前里の想定年代

金元龍は慶州入室里（藤田 他 1925）出土銅矛にみられる菱文と川前里岩刻画の菱文が酷似すると指

摘し、青銅器時代の所産であると主張した（金元龍 1973）。なお、入室里の年代について後藤直は出土した叩き目のある小形鉢と牛角形把手から原三国時代直前の「無文土器終末期」に編年しており（後藤 1982）、今日の初期鉄器時代に該当する。また、後に幾何学文は古新羅末期から現われる印花文土器と相通する面もあるが、動物文・人面などは盤亀台岩刻画を通してより先行する時期のものである可能性があるため、青銅器時代後期・原三国時代からあった岩刻画に古新羅時代末期から統一新羅時代にかけて文様と銘文が加筆されたものとみた（金元龍 1983）。

岩刻画の製作技術に着目した黄龍渾は川前里下部における岩刻は沈線技法（第Ⅱ技法）で製作されており、青銅器時代の所産であるとした。また川前里上部の同心円、渦文、菱文などは研磨技法（第Ⅲ技法）で製作されており、青銅器時代以降のものであるとした（黄龍渾 1975）。

金用珩ら北韓の研究者は、川前里と芝草里の類似を指摘し、新石器時代の土器文様との類似から、新石器時代の所産とみている（金用珩 1990、社会科学院歴史研究所・考古学研究所 1991）。

宋華燮は盤亀台と川前里は新石器時代末とみるのが普遍的であるとしながらも、川前里では盤亀台とは異なる文様もみられることから盤亀台とは時間差があると述べた（宋華燮 1993b）。

製作技法で編年した張明洙は川前里では動物文は面敲打技法で製作されているので、青銅器時代Ⅰ期に、仮面と幾何文は広く深い線研磨技法で製作されているので初期鉄器時代Ⅲ期、記録画は沈線技法で描かれるので古代に編年されると述べている（張明洙 1996）。

金貞培は川前里岩刻画に太陽を象徴する同心円があり、支石墓の上石にみられる同心円との関係を想定し、また、一部の幾何文様は龍を象徴しているとして、青銅器時代の所産であると述べた（金貞培 1997）。

任世権は川前里の面敲打技法による動物画を深い線刻技法による幾何学文が破壊していることから先後関係が明らかであると述べている。しかし、動物画が青銅器時代と推定した場合でも、幾何学文は鉄器時代とみることができないとする。シベリアでは鉄器時代の岩刻画は細い線で刻んだ画像が多く、川前里幾何学文とは差異があることを根拠としている。そこで、青銅器時代前期に動物画、青銅器時代後期に幾何学文画、鉄器時代には鋭い鉄器で細線刻により製作された記録画が該当するという編年観を示した（任世権 1999）。

細線刻画について全虎兌により 5～6 世紀のもので想定され（全虎兌 1999）、銘文については姜鍾薫

により 6 世紀前半のもので判断されている（姜鍾薫 1999）。

李夏雨は動物表現については図式化過程の進行度合いから、自身の盤亀台編年と比較した場合、盤亀台第 3 製作層と同時期であると述べた。また幾何学文についてはその多くを占める菱形文が女性性器を示し、女性の生理機能と農耕の生産性が一つの象徴体として結合しているものと判断し、農耕生活に基盤をおいた青銅器時代の所産であるとみた。動物画も青銅器時代と判断しているが、細部的な時期差があるとした。細線刻技法については細線刻で製作された瑞獸画と慶州皇南洞味雛王陵地区 C 地区 3 号墳出土瑞獸形土器を比較し、一部は 4 世紀～6 世紀前半頃の積石木槨墓築造時期であるとした（李夏雨 2011b）。

(3) 鳳坪里岩刻画の想定年代

岩刻画を発見・調査した大伽耶博物館では、青銅器時代の琵琶形銅矛や磨製石剣が描かれていることや、岩刻画のある岩面の一部を覆っている最下層の第 3 層で青銅器時代の石器剥片が出土したことから、青銅器時代に製作されたとみている（大伽耶博物館 2008）。

(4) 防牌形岩刻画の想定年代

防牌形岩刻画として早い段階に発見された良田洞岩刻画について李殷昌は、附近の丘陵に粘土帯土器、高杯、牛角形把手等が出土する遺跡があり、その年代を同年代とみた（李殷昌 1971）。

岩刻画の製作技術に着目した黄龍渾は良田洞では沈線技法（第Ⅱ技法）と研磨技法（第Ⅲ技法）で製作されており、青銅器時代以降のものであるとした（黄龍渾 1975）。

一方、三上次男は良田里の防牌形岩刻画を韌とみて、同心円文を日輪文であるとみた。日輪と韌の組み合わせは北部九州の装飾古墳の壁画や線彫（佐賀県立博物館 1973）と共通し、北部九州以外では東北アジアに存在しないことから、北部九州古墳時代中・後期の 5～6 世紀のものであるとした（三上 1977）。

宋華燮は仁屁洞 16 号支石墓にみられる石剣岩刻画から金丈台の変形石剣文様、七浦里の幾何学的石剣文様へ変化し、剣把部分が強調され、象徴化することで防牌形（剣把形幾何学文）岩刻画が成立するとみている。また、石鏃岩刻画についても同様の変遷を想定している（宋華燮 1994）。剣把形幾何学文岩刻画自体については仁屁里一七浦里一可興洞・良田洞・南原大谷里Ⅰ式—南原大谷里Ⅱ式・安和里という変遷を想定

している。このような変遷過程からみると防牌形岩刻画の年代は支石墓の年代以降ということになり、紀元前 6～4 世紀の所産であると述べている（宋華燮 1993b）。

韓馨徹も宋華燮と同様に仁屁洞の石剣から防牌形岩刻画が成立したとみている。また、防牌形岩刻画自体の変遷としては、七浦崑崙山などの初期、石長洞金丈台を経て、甫城里、良田洞、南原大谷里（左側）などの発展期、安和里、南原大谷里、可興洞、安心里などの消滅期と変遷するとした（韓馨徹 1996）。

李相吉は甫城里、金丈台、上辛里で確認される両側面が緩慢に湾曲し上下が直線である類型（類型 1）、甫城里、七浦里、南原大谷里、安和里で確認される上部が V 字に屈曲する類型（類型 2）、甫城里、南原大谷里、安和里で確認される上部外郭のみに羽毛が表現されている類型（類型 3）、南原大谷里、安和里、良田里で確認される上部及び両側面に羽毛が表現されている類型（類型 4）、南原大谷里、七浦里で確認される上部が直線で、両側面が強く湾曲したり「く」の字に屈曲する類型（類型 5）、可興洞で確認される両側面は湾曲し、内部には性穴がみられず主に横線が入る類型（類型 6）に分類した。そして、1 段階には類型 1、2 段階には類型 2、3 段階には類型 5 と類型 3、4 段階には類型 5 を継承した類型 6、類型 3 を継承した類型 4 が該当するという編年案を提示した。遺跡別では上辛里が 1 段階～2 段階初、石長洞が 1 段階半ば～2 段階、甫城里が 1 段階半ば～3 段階、安和里が 2 段階～3 段階、南原大谷里が 2 段階～3 段階、七浦里が 2 段階～4 段階初、良田洞が 2 段階終末～4 段階初、可興洞が 4 段階と編年される。良田里、金丈里、上辛里では附近で粘土帯土器期の遺跡が所在するため、岩刻画の年代も粘土帯土器の時期であるとみている（李相吉 1996）。

一方、製作技法で編年した張明洙は金丈台では動物文は線敲打技法、足跡文と花文は面研磨技法、防牌文、舟文、生殖器文は狭く浅い線研磨技法で製作されていることから青銅器時代Ⅱ期～初期鉄器時代Ⅰ期に、安和里の防牌文と同心円文は線敲打技法で製作されることから、青銅器時代Ⅱ期に、甫城里防牌文は狭く浅い線研磨技法で製作されることから、初期鉄器時代Ⅰ期に、良田里では防牌文が面研磨技法と線研磨技法、同心円文は広く浅い線研磨技法で製作されることから初期鉄器時代Ⅱ期に、南原大谷里防牌文は広く浅い線研磨技法と広く深い線研磨技法で製作されていることから初期鉄器時代Ⅱ期～Ⅲ期に、七浦里の防牌文と生殖器文は主に面研磨技法と広く深い線研磨技法で製作さ

れていることから初期鉄器時代Ⅲ期に、可興洞防牌文は隆起研磨技法で製作されていることから初期鉄器時代Ⅳ期に編年されると述べている（張明洙 1996）。

金貞培は防牌形岩刻画を仮面であると想定している。川前里や盤亀台では人物と仮面がみられるが、金丈台岩刻画以降、人物像がみられなくなることから、川前里や盤亀台よりも防牌形岩刻画は後行するとみている（金貞培 1997）。

李夏雨は二段柄磨製石剣の剣把から仁屁里支石墓岩刻画を経て、初期（発生期）の防牌形岩刻画である七浦里や金丈台へ変遷したとする。その後、装飾化・定型化した発展期（定型期）には甫城里→安和里→良田里、池山洞へと変遷し、南原大谷里 B、を経て、消滅期の可興洞、大谷里 A、安心里へと変遷するとした。時期は仁屁里支石墓を青銅器時代中期、七浦里、金丈台をやや遅れる青銅器時代中期、甫城里を青銅器時代中期末から後期初、良田里などを青銅器時代後期、可興洞などを鉄器時代初であるとみている（李夏雨 2011b）。

(5) その他の岩刻画の想定年代

製作技法で編年した張明洙は水谷里では足跡文が面敲打技法で製作され、馬蹄文、鳥、ユッパン（우판）、穴が線敲打技法で製作されることから青銅器時代から初期鉄器時代Ⅰ期に編年されると述べている（張明洙 1996）。任世権は水谷里と防牌形岩刻画がみられる金丈台では共に足跡文がある点が共通するし、さらに内蒙古の陰山（蓋山林 1986）や烏蘭察布（蓋山林 1989）に源流を求めている（任世権 1996）。

光令里の年代については青銅器時代後期を上限とする可能性があるとしながらも、周辺の外都洞遺跡（済州文化芸術財団 2005）との関係から紀元 200 年前後の時期であるとされている（김종찬 2013）。

(6) 支石墓・立石岩刻画の想定年代

仁屁洞 16 号支石墓に描かれた石剣は無血溝二段柄式の中の有溝柄式で、石鏃は挟入式であるとみたことからそのような組成の遺物が出土している欣岩里 12 号住居址（任孝宰 1978）の年代を基準に紀元前 6～5 世紀であるとみられている（李健茂 他 1985）。

円文と性穴がみられる 4 号支石墓のある苧浦里 E 地区の支石墓については出土遺物から前期無文土器時代中葉から後葉にかけて築造されたと考えられている（釜山大学校博物館 1987）。

道項里の岩刻画がある支石墓の年代に関しては支石墓の下部構造が調査された 4 号については単純土

壙である点や赤色磨研土器の様相などから松菊里段階の遅い段階であると報告者はみている(崔憲燮 1992、昌原文化財研究所 1996)。㇗号は下部構造が調査されていないため詳細な時期は触れられていないが、道項里支石墓群の年代が松菊里段階であることから、同様の年代が考えられる。

辰泉洞の年代について報告者の李白圭と呉東昱は基壇周辺で出土した土器に青銅器時代前期に編年される口唇刻目土器が出土し、青銅器時代前期中葉から粘土帯土器段階まで継続する外反口縁と突起附土器が出土することから、青銅器時代前期前半頃に築造され、後半まで利用された可能性が大きいと述べた(李白圭・呉東昱 2000)。

金炳燮は岩刻画のある祭壇支石墓の年代について次のように言及している。サルレの場合は祭壇支石墓と同一層位で畑遺構が造成されているが、畑層上面で円形粘土帯土器が出土しているため、円形粘土帯土器段階であるとする。新安の祭壇支石墓は内部調査がなされなかったが、1号祭壇支石墓から墓域施設内で断面抹角方形の蛤刃石斧1点が出土しており、松菊里文化の蛤刃石斧の断面が円形または楕円形であることとは差異がある点や、1号祭壇支石墓と同一層位で確認された1号竪穴では壁面に突出した炉跡がみられ、同様に松菊里文化のものとは差異がある点などから、年代を松菊里文化の最終段階から円形粘土帯土器段階であるとする。辰泉洞は青銅器時代前期に造成され、後期まで利用されたとみられているが、出土遺物は位置が正確でない周辺収集遺物で青銅器時代前・後期の遺物とともに粘土帯土器片も含まれ、青銅器時代前期に造成時期を遡らせる根拠は希薄であるとする(金炳燮 2009)。

馬双里1号墓では抉入石斧、有肩石斧(遼東型伐採斧)が出土し、1号積石土壙墓に伴うとみられる1号石列では直立口縁の無文の土器、把手附土器、平底の底部などが出土しており、青銅器時代の所産であると考えられている(柳昌煥 他 2012)。

李夏雨は支石墓等について辰泉洞→本村里・馬双里→雲谷洞→道項里→五林洞→新安・サルレ→川内里と変遷するとし、辰泉洞を青銅器時代中期、馬双里から五林洞を青銅器時代後期、新安・サルレを青銅器時代後期末から初期鉄器時代初、川内里を初期鉄器時代と位置づけている(李夏雨 2011b)。

(7) 刻画石の想定年代

本村里㇗10号住居址で出土した岩刻画は再加工した琵琶形銅剣であるとみられ、順天山山里(송정현・

이영문 1988)で出土した再加工琵琶形銅剣に最も類似しているとされている。本村里㇗10号住居址は方形形態であることから青銅器時代後期(松菊里段階)に編年されている(趙榮濟 他 2011)。

(8) 三国時代古墳岩刻画の想定年代

大蓮里岩刻画は古墳築造ときに製作されたものとみられている(李夏雨 2011b)。

福泉洞79号墳は出土遺物から5世紀後半とみられている(宋桂鉉 他 1995)。古墳とは直接関係がなく、他の場所から運ばれたという見解もあるが、李夏雨は靈魂を運ぶ舟、祈祷する人物など葬儀と関連して製作されたものとみて、古墳に伴うものと考えている(李夏雨 2011b)。

4. 韓半島南部岩刻画の編年

まず、韓半島南部の岩刻画の中で、時期が確実な事例は支石墓・立石等に描かれた岩刻画である。道項里㇗号支石墓は、出土した赤色磨研土器から報告者の指摘のとおり松菊里段階のものと考えられ、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、㇗号支石墓も同じ支石群に属することからほぼ同様の年代が与えられるものと考えられる。道項里支石墓は出土遺物から粘土帯土器段階まで時期が下る可能性はほとんどないものと考えられるので、青銅器時代後期のものと考えられる。尹昊弼の研究によると道項里では蓋石が上下に離れており、その間や上部が石や土で充填される型式に該当する支石墓がみられるため遅い段階に位置づけられるとされており(尹昊弼 2013)、松菊里段階でも遅い段階のものであるとみられる。

道項里㇗号支石墓のほか苧浦里E地区4号支石墓、新安Ⅱ地区1号支石墓と4号支石墓、サルレ1号祭壇支石墓は、いわゆる墓域支石墓と呼ばれる形態の支石墓・祭壇遺構である。金炳燮が指摘したとおり、出土遺物からは新安やサルレのような墓域支石墓は粘土帯土器まで年代が下る可能性が高い。川内里、仁屁洞、五林洞などの墓域支石墓ではない支石墓については、時期的な編年が困難であるため、本稿では青銅器時代後期から初期鉄器時代のもののみとしておく。

次に時期が確実なもののみとされるのは、鳳坪里岩刻画のように銅剣・銅矛・石剣が描かれた岩刻画である。鳳坪里では岩刻画が描かれた岩面を覆う土層堆積の調査からも青銅器時代の所産であることが裏付けられている。銅剣、石剣などが描かれる岩刻画は支石墓に多くみられ、仁屁洞、五林洞、サルレ、馬双里などで認められ、本村里の刻画石でも再加工琵琶形銅剣が刻ま

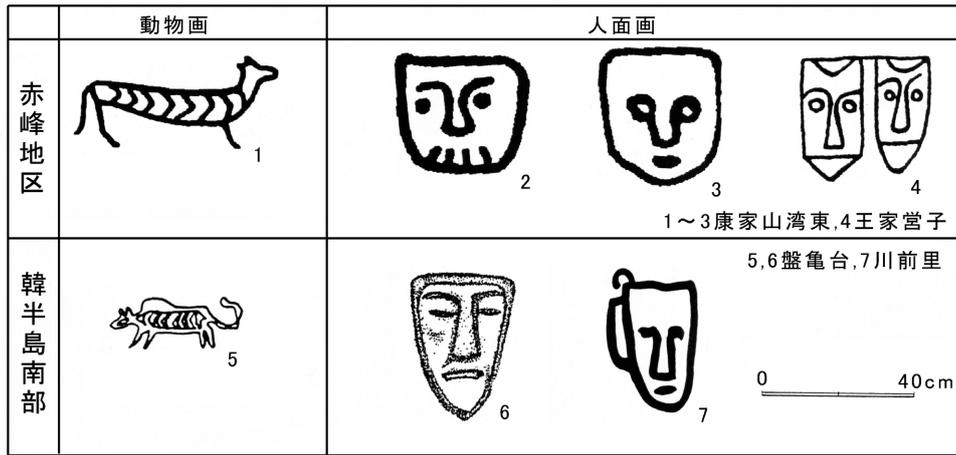


図 27 赤峰地区と韓半島南部岩刻画の比較

れている。このような銅剣・石剣が描かれる岩刻画は支石墓の編年的位置からみても青銅器時代後期（松菊里段階）から一部は初期鉄器時代（粘土帶土器段階）にいたる段階に製作されたものと判断することができる。ただし、石剣表現においては仁屁洞支石墓と五林洞では差異があり、五林洞が先行する可能性が高い。また、再加工琵琶形銅剣が描かれた本村里出土刻画石も青銅器時代後期の範疇で収まる可能性が高い。

防牌形岩刻画については、多くの研究者が述べているように、仁屁洞支石墓に描かれる石剣・石鏃表現と金丈台の防牌形岩刻画に関連が認められるため、金丈台は防牌形岩刻画の中でも早い段階に位置づけられる。上部と側面に単線に羽毛状の装飾がなされる防牌形岩刻画は遅い段階に出現するという見解もあるが、金丈台では石鏃様の湾曲する三角形の上部に単線の装飾がなされるものがあり、このような装飾は比較的早い段階から存在するものとみられる。防牌形岩刻画の中で、最も遅い段階のものは多くの見解にみられるように、防牌形の退化形態である点、製作技法が異なる点から可興洞の岩刻画であると考えられる。従って、本稿では金丈台→典型的な防牌形岩刻画→可興洞という大枠での変遷を考えたい。仁屁洞支石墓に金丈台が後続するとみた場合、防牌形岩刻画の年代は多くの見解にみられるように青銅器時代後期から初期鉄器時代が想定される。なお、七浦里では推定支石墓で防牌形岩刻画と石鏃が描かれており、この資料が支石墓であった場合は、年代上の定点となる有力資料となるが、支石墓であるかどうか確認がない。

水谷里では足跡文、馬蹄文がみられるが、青銅器時代の鳳坪里では馬蹄文、青銅器時代後期～初期鉄器時代の金丈台では足跡文、動物足跡文がみられ、関連が

想定される。本稿では水谷里の岩刻画についてはヒトの足跡と動物足跡の組成がみられる金丈台の同様の年代を与え、青銅器時代後期～初期鉄器時代と判断する。

以上から、鳳坪里、五林洞、本村里は青銅器時代後期、防牌形岩刻画、水谷里岩刻画、墓域支石墓を中心とする支石墓に描かれる岩刻画は青銅器時代後期～初期鉄器時代という年代が想定される。次に問題となるのは、盤亀台と川前里の岩刻画の年代的な位置である。両岩刻画では防牌形岩刻画とは全く異なる岩刻画が描かれているため、基本的に初期鉄器時代より先行するものと考えられる。

盤亀台及び川前里でみられる面刻技法と線刻技法は文明大や任世権らにより指摘されてきたとおり（文明大 1973、任世権 1999）、その重複関係から面刻技法画から線刻技法画へと変遷するものと考えられる。面刻技法においては盤亀台と川前里でシカ等の動物画というモチーフにおいても共通性が高いため、その同時期性はある程度確実であろう。線刻技法においては盤亀台では陸棲・水棲動物画が主である一方、川前里では同心円文・渦文・菱形文など幾何文が主体となっており、差異が認められる。しかし、宋華燮、金貞培、任世権、朴廷根が指摘したように線刻技法による人面画は両岩刻画で類似していることから（宋華燮 1996、金貞培 1997、任世権 1999、朴廷根 2001）、近い時期に製作されたものではないかとみられる。すなわち、同時期に異なるモチーフを描いたのではないかと考えられる。川前里の線刻技法幾何文画は敲打後、研磨しているという特性から、鉄器時代に編年されたこともあったが、近年発見された青銅器時代の所産であることが確実な鳳坪里岩刻画でも同様の技法で製作されていることからみて、川前里線刻技法幾何文画と

表 3 韓半島南部岩画の編年

時期	岩画								三国時代古墳	渦文	同心円文	菱文
	大谷里盤亀台	川前里	鳳坪里	防牌形	其他	支石墓等	刻画石					
新石器時代	?	?										
青銅器時代早・前期 ～後期	面刻技法動物画 線刻技法動物・人面画	面刻技法動物画 線刻技法人面画・幾何学文								川前里	川前里	川前里
青銅器時代後期			鳳坪里			五林洞	本村里					
青銅器時代後期 ～初期鉄器時代				金文台一七浦里, 南 城里, 安心里, 上辛 里, 良田里, 安和里, 大谷里一可異洞	水谷里	仁鹿洞, 道項里, 芋浦 里, 辰泉洞, 新安, サ ルレ, 馬双里				辰泉洞	良田里, 安和里, 道項 里, サルレ, 新安, 辰泉 洞, 川内里	
三国時代		細線刻技法行列画等							大蓮里, 福泉洞 79号墳	福泉洞79号墳	福泉洞79号墳	

の関係が想定される。したがって、盤亀台線刻動物画、川前里線刻幾何文画、鳳坪里線刻画は近い時期に製作されたもので、青銅器時代に編年されるものとみられる。さらに、筆者が目にするのは、盤亀台と川前里で見られる線刻人面画と盤亀台で見られる線刻動物画である。川前里の線刻人面画は逆三角形に近い輪郭に眼と鼻を繋げて表現している。盤亀台の線刻人面画では逆三角形に近い輪郭に眉と鼻を繋げて表現している。さらに、盤亀台の線刻動物画には胴部に折線を描いているものが数例認められる。眼または眉と鼻を繋げる人面画と胴部に折線のある動物画は康家山湾東などで共伴しているとおろ、赤峰地区でもみられる岩刻画である(図27)。そして、赤峰地区ではこれらの岩刻画は夏家店上層期に編年される。盤亀台や川前里の線刻岩刻画が赤峰地区の夏家店上層期の岩刻画と関連があるとすると、青銅器時代に編年することは時期的に矛盾がない。但し、赤峰地区と韓半島南部の中間地帯である遼東地域、韓半島西北部、韓半島中部で岩刻画が未発見であるため、直接関連するかどうかは不確実である。しかし、琵琶形銅剣をはじめとする韓半島南部の青銅器時代の青銅器等は中間地帯を介して、夏家店上層期に始原を求めることができ(中村2007)、また精神文化に関わる副葬風習も同様である(中村2012)ため、夏家店上層文化の韓半島南部への影響は一定程度想定できる。盤亀台・川前里線刻画に夏家店上層文化の影響が認められるとすると、青銅器等の動向と連動したものであった可能性が高い。遼東地域や韓半島北部のように元来岩刻画を製作する習慣のなかった地域では岩刻画が受容されず、韓半島南部のように面刻技法の岩刻画を製作する習慣のあった地域では夏家店上層文化に始原を持つ岩刻画が採用されたという可能性も十分に考えられる。

盤亀台及び川前里の面刻画は線刻画に先行するのは確実であるが、先行する時期の範囲が青銅器時代で収

まるのか、新石器時代まで遡及するのかが判断が困難である。本稿では盤亀台の面刻画と線刻画で動物モチーフが共通するという任世権らの指摘に従い、近い時期のものと考え、青銅器時代に編年するが、河仁秀や姜奉遠の指摘のとおり新石器時代まで遡及する可能性は少なくないものと思われる。

三国時代古墳に伴う岩刻画は、比較的時期が明確であるが、福泉洞79号墳岩刻画は古墳との直接的な関係に疑義があるようである。九州の装飾古墳でも舟が描かれることがあり、関連を想定することもでき、また、舟の表現自体はこれまで発見されている韓半島南部先史時代の表現とは異なるので、李夏雨と同様、筆者も古墳に伴うものであると考える。以上の編年案を整理したものが表3である。

5. 渦文・同心円文・菱文のある岩刻画の年代

ここでは、上でみた韓半島南部岩刻画の編年に則り、芝草里と関連する可能性のある渦文、同心円文、菱文の年代について考察する。

渦文がみられるのは、川前里と辰泉洞である。川前里では線刻技法で渦文が表現されており、青銅器時代に属するものと考えられる。辰泉洞では花崗岩立石の西面に4個の渦文がみられ、青銅器時代後期～初期鉄器時代に属する。また福泉洞79号墳でも渦文が認められる。従って、これまでのところ韓半島南部では青銅器時代から初期鉄器時代に至る時期および三国時代に渦文が認められることとなる。

韓半島南部の岩刻画における同心円文については朴廷根や李夏雨によって注目され、その象徴や意味についてさまざまな解釈が示されている(朴廷根2003、李夏雨2011a)。同心円文は、川前里岩刻画、良田里・安和里といった防牌形岩刻画、道項里・サルレ・新安・辰泉洞・川内里といった支石墓岩刻画、福泉洞79号墳といった三国時代古墳にみることができ

表 4 芝草里岩刻画の年代と系統に関する想定可能性

		選択肢	想定される時期	番号
周辺地域と関係がある	沿アムール地域	サカチ・アリヤン等と関係がある	ヴォズネソフカ文化(新石器時代後期)	①
		サカチ・アリヤン81号岩と関係がある	金属器時代	②
	赤峰地区	夏家店下層期以前の岩刻画の渦文・同心円文と関係がある	新石器時代(夏家店下層期以前)	③
		康家山湾の同心円文と関係がある	夏家店下層期	④
		疙瘩山跃进渠渠首の渦文と関係がある	夏家店上層期	⑤
	韓半島南部	川前里と関係がある	青銅器時代	⑥
		防牌形岩刻画に伴う同心円文と関係がある	青銅器時代後期～初期鉄器時代	⑦
		支石墓に伴う同心円文・渦文と関係がある	青銅器時代後期～初期鉄器時代	⑧
		三国時代古墳に伴う同心円文・渦文と関係がある	三国時代	⑨
周辺地域と関係がない (独自形成または未発見 岩画と関係)	洞窟内石棺墓と関係がある	虎谷4～5期(青銅器時代～初期鉄器時代)	⑩	
	洞窟内石棺墓と関係がない	時期決定不可能	⑪	

る。川前里は上述のとおり線刻技法幾何文に伴うことから、青銅器時代に、防牌形岩刻画は青銅器時代後期～初期鉄器時代に、支石墓岩刻画は青銅器時代後期～初期鉄器時代にそれぞれ属する。従って、これまでのところ韓半島南部では青銅器時代から初期鉄器時代に至る時期および三国時代に同心円文が認められることとなる。

菱文は川前里線刻幾何文に認められることから、青銅器時代には認められることとなる。芝草里で見られた渦文、同心円文、菱形文の全ての組み合わせは、これまで指摘されてきたように川前里線刻幾何文でのみ認められるようである。

VIII. 芝草里岩刻画の年代と系統

以上で、芝草里岩刻画と関連が想定される周辺地域の岩刻画の編年及び渦文・同心円文・菱文の年代について整理した。これを基礎として、芝草里の年代及び系譜についてさまざまな可能性を想定することができる。

周辺地域と関係があるかどうか、あるとすれば、どの地域と関係があるか、その中でもどの岩刻画と関係があるか、周辺地域と関係がないとすれば、芝草里洞窟内石棺墓との関係はあるかといった項目ごとに選択肢を整理すると表 4 のとおり 11 通りの可能性を具体的に示すことができる。

この 11 案のうちどれが最も可能性が高いのであろうか。まず、周辺地域との関連性の有無について検討する。芝草里岩刻画は渦文、同心円文、菱文で構成されており、人物、人面、動物といった具象画が含まれていないことは顕著な特徴である。このような岩刻画は沿アムール地域、赤峰地区、韓半島南部ではほとんど存在しない。周辺地域では、渦文や同心円文はおおむね人面画や動物画などの具象画とともに製作されることが多く、このことは、芝草里で独自に岩刻画が製

作されたとするには有利な条件となる。

しかし、より巨視的な観点で、北アジアの岩刻画を検討すると、渦文や同心円文は赤峰地区、沿アムール地域、韓半島南部といった東北アジアに特徴的にみられる岩刻文様である。すでに、A. П. オクラドニコフは渦文など曲線の多様は、シベリアやモンゴル高原の岩刻画とは区別される極東地方の岩刻画の特徴であると指摘している(オクラドニコフ1968)。事実、沿アムール地域より西方の沿バイカル(Okladnikov 1974)、レナ川上流域(Okladnikov 1977)、モンゴル高原(Okladnikov 1981、노브고라도마 1995)などでは同心円文や渦文はあまりみられない⁸⁾。赤峰地区より西方の陰山(蓋山林 1986)、烏蘭察布(蓋山林 1989)、賀蘭山(周興華 1991、許成・衛忠 1993)などの大岩画地帯でもその岩画の数量に比して、渦文、同心円文の数量は極めて限定的である。赤峰地区と陰山山脈の中間地域である錫林郭勒の岩画(蓋山林・蓋志浩 2002)でわずかに同心円文が認められるのみである。このことから、芝草里岩刻画の様相は、渦文や同心円文の多用という東北アジア岩刻画にみられる最も顕著な特徴の一つを具備しているとみられ、やはり、東北アジアの中のいずれかの周辺地域と関連する可能性が高いように思われる。

それでは、東北アジアの中の周辺地域の中で、関連する地域はどの地域である可能性が最も高いのであろうか。まず、芝草里に最も近く、土器をはじめとする文化要素の内容や変遷が豆満江流域と類似する沿海州や牡丹江流域の岩画が注目されるが、《メドヴェージ・シェーキ》の岩刻画とはモチーフの点で芝草里と異なっており、また群力村の岩画も製作技法、モチーフなどの点で芝草里とは全く異なっているため、直接対比することは不可能である。従って、関連地域としての選択肢からは除外される。

芝草里の渦文、同心円文、菱文という組成である

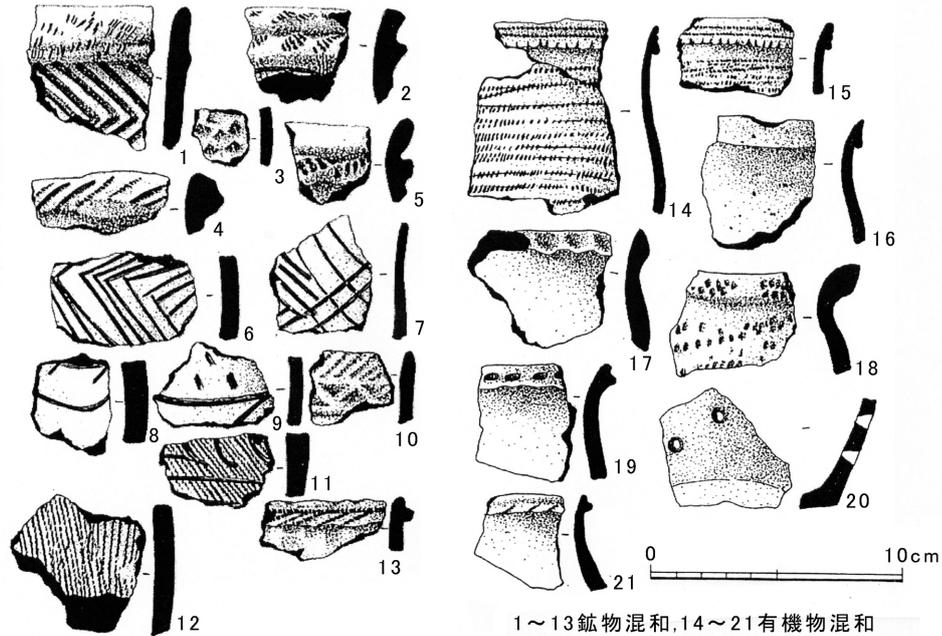


図 28 ダリニー・クート 15 出土土器

が、組成として最も近似するのは、金用珩、림룡弓、徐国泰、李夏雨らが想定したとおり、川前里であることは事実である。ところで、韓半島南部と豆満江流域の間には、咸鏡南道、嶺東地域など岩画の空白地帯が存在し、直接関連を想定することが難しいという問題がある。これは、沿アムール地域や赤峰地域にも共通する問題である。赤峰地域の場合は、遼東地域という岩刻画の空白地帯があり、沿アムール地域の場合でも、沿海州などの岩刻画が乏しい地帯が認められる。

ところで、岩刻画は周知のとおり祭儀などの精神文化に関わる遺構である。精神文化は保守的な一面があり、精神文化面で他地域からの影響を受容することは、相当に大きな文化的影響を受けたものと推測される。このような観点からみた場合、岩刻画以外の文化動態との関連性が重要となる。

先に挙げた沿アムール地域、赤峰地区、韓半島南部のうち、岩刻画の空白・貧弱地帯を通して芝草里の所在する豆満江中流域と文化的接触があったと想定される地域と時期としては、ヴォズネセノフカ文化期の沿アムール地域（表 4①案）と夏家店上層期の赤峰地区（表 4⑤案）が挙げられる。

ヴォズネセノフカ文化期に併行する豆満江中流域の土器文化様相は明確ではないが、東風類型（楊占風 2013）が展開しているものとみられる。この東風類型は筆者の述べる沿海州や牡丹江流域に展開するザイサノフカ文化新 3 段階に該当する（古澤 2014b）。このザイサノフカ文化新 3 段階では沿アムール地域と

関係が強く認められる。既に多くの研究者が主張しているようにザイサノフカ新 3 段階とヴォズネセノフカ文化にみられる断面三角形の二重口縁は関係があるものと考えられる（大貫 1992）。特に H. A. クリュエフと O. B. ヤンシナはヴォズネセノフカ文化と関連のある一群の土器が沿ハンカ湖地域に認められるという指摘（Клюев, Яншина 2002）をしており重要である。アヌーチナ 14 ではヴォズネセノフカ文化の影響を受けた土器群が沿ハンカ・グループの土器とともに出土している（Клюев, Яншина 2002）。このほかグラゾフカ城（Коломиец et al. 2002）、チェルニゴフカ 1（Сапфиров 1989）、ゴルバトカ 3（Кузнецов, Якупов 2004、伊藤・内田 2004）など沿ハンカ地域のほかの遺跡でもヴォズネセノフカ文化の影響を受けた土器がみられる。

沿海地方クラスノアルメイスキー地区に所在するボルシャヤ・ウスルカ川流域のダリニー・クート 15 では沿アムール地域土器と一連の土器が出土している（Клюев, Гарковик 2002）。沿アムール地域では И. Я. シェフコムードがカリチョーム 3 出土資料を基にヴォズネセノフカ文化の土器をゴリン式（ホライズン B）→オレル式及びウディリ式（ホライズン B）→マラヤ・ガヴァニ式（ホライズン A）という変遷を明らかにしている（Шевкомуд 2004）。報告者である H. A. クリュエフと A. B. ガルコヴィクはダリニー・クート 15 で出土した新石器時代土器中、鈳物を混和した土器（図 28-1 ~ 13）はマルィシェヴォ文化最終末期及

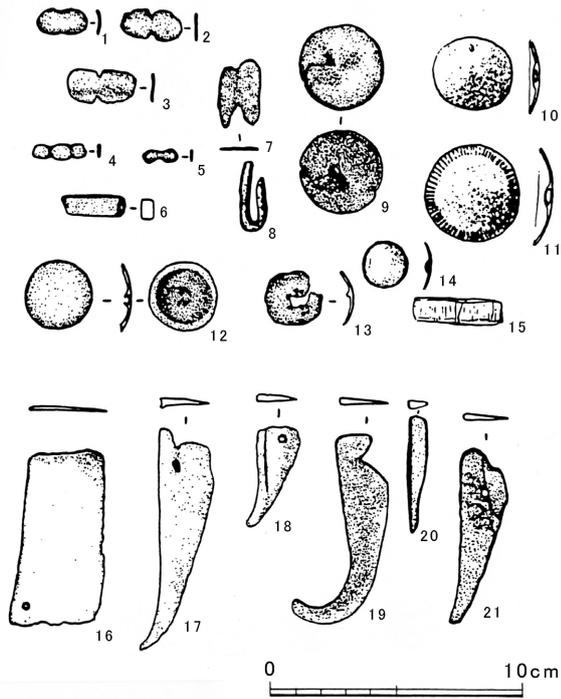


図 29 シニ・ガイ A 上層出土青銅器

びゴリン式に、有機物を混和した土器（図 28-14～21）はマラヤ・ガヴァニ式に対比できると述べている（Клюев, Гарковик 2002）。ハンカ湖から約 100km のダリニー・クート 15 までヴォズネセノフカ文化が展開していることから、沿ハンカ湖地域は最も沿アムール地域からの影響を受けていることが了解される。

伊藤慎二はクリューエフらの見解を踏まえ、シニ・ガイ A 下層、オレニー A、オレニー B（Бродянский 1987）で認められる非常に細長く繊細な櫛文を施文した土器もヴォズネセノフカ文化の影響とみており（伊藤 2006）、筆者も支持したい。ただし、伊藤は黒龍江省・吉林省側ではヴォズネセノフカ文化の影響を受けた土器がみあたらないとしているが、近年報告された綏芬河流域の建新北（張志成 他 2012）、建新東溝（張志成 他 2011）、鮑付溝東（張志成 他 2011）、鮑付溝西（張志成 他 2012）などでみられる多歯具などにより、細かな点列文で垂直ジグザグ文などが構成される土器などにヴォズネセノフカ文化の影響を想定できるので、綏芬河流域などでは沿ハンカ地域と同様に沿アムール地域からの影響を考慮することができる。

このように沿ハンカ湖地域や牡丹江流域ではヴォズネセノフカ文化の南下に伴い、その影響を受けた土器が土器様式の組成に加わる。芝草里の位置する豆満江中流域では、これまでのところ、ヴォズネセノフカ文化の影響を受けた土器は確認されていないが、東風類

型には牡丹江流域や沿ハンカ湖と関連の深い土器がみられるため、ヴォズネセノフカ文化からの文化的影響を受けた可能性は十分にある。

さらに、精神文化という面では、偶像・動物形製品の動向も重要となるが、沿海州東海岸のリドフカ文化にみられる土偶と沿アムール地域のコンドン 3 号住居址（Окладников 1973）などヴォズネセノフカ文化期の土偶との関連を想定する見解がある（金材胤 2008）。ヴォズネセノフカ文化とリドフカ文化が併行関係にないため、その当否の判断は難しいが、上で述べたようなザイサノフカ新 3 段階におけるヴォズネセノフカ文化からの影響関係から、可能性は否定できないものと考えたことがある（古澤 2014a）。ただし、この場合であってもヴォズネセノフカ文化に始原がある可能性はあるが、リドフカ文化の偶像とは直接の系譜関係は想定し得ないだろうと考えられる。沿海州等のザイサノフカ文化新 3 段階、プフスン上層期および沿アムール地域のヴォズネセノフカ文化期以後の偶像の様相がさらに明らかになるのを待たなくてはならない。

次に豆満江中流域と夏家店上層文化との関係について検討する。豆満江中流域のさらに東方にあたる沿ハンカ湖地域ではシニ・ガイ文化が設定されている。このシニ・ガイ文化は豆満江中流域の虎谷 2 期から虎谷 3 期に併行するものとみられているが（白杵 1989、大貫 1996）、筆者は、豆満江中流域と非常に関連性の深い文化であると考ええる。このシニ・ガイ文化の標式遺跡であるシニ・ガイ A 上層（Бродянский 1987）では釧（泡）、連珠飾、刀などの青銅器が出土している（図 29）。このうち連珠飾（図 29-1～5）は白杵勲や姜仁旭が指摘したとおり夏家店上層期のものと類似する（白杵 1989、姜仁旭 2009）。

夏家店上層文化と豆満江中流域では土器は全く異なり、またその中間地帯である遼東地域や鴨緑江上流域でも土器においては連鎖的な影響関係は全く認められないが、青銅器にはシニ・ガイ文化に夏家店上層文化との関連が認められる点で、直接の関係は想定困難であるものの、間接的な影響関係は認められる。

以上のとおり岩刻画の空白・貧弱地帯（沿海州、遼東地域等）を通して文化的影響を豆満江中流域に及ぼしたとみられるのはヴォズネセノフカ文化と夏家店上層文化であるが、その影響の度合いは異なり、土器文化にまで及ぶ強い影響関係が認められるのは、ヴォズネセノフカ文化期の沿アムール地域との関係である。ヴォズネセノフカ文化の影響は面的である一方、夏家店上層文化の影響は点的である。

そのため、芝草里の年代と系統について先に 11 案を提示したが、この中で最も可能性が高いのは、サカチ・アリャンをはじめとするヴォズネセノフカ文化期の沿アムール地域との関係で芝草里岩刻画が形成された可能性（表 4 ①案）であると筆者はみている。この場合、芝草里岩刻画の年代は、ヴォズネセノフカ文化との併行関係上、東風類型を前後する時期、すなわち新石器時代後期・末となる。

その次に可能性が高いのは夏家店上層期の赤峰地区との関係で芝草里岩刻画が形成された可能性（表 4 ⑤案）である。この場合、芝草里岩刻画の年代は、夏家店上層期との併行関係上、虎谷 3 期を前後する時期、すなわち青銅器時代となる。筆者は、韓半島南部の盤亀台や川前里の線刻画に夏家店上層文化の間接的な影響を想定しているため、芝草里と川前里の類似は偶然によるものではないということになる。ただしこの場合でも芝草里と川前里の類似は直接的影響関係によるものではなく、同じ夏家店上層期の岩画を母胎としているため、モチーフが類似したという、兄弟やイトコのような関係ということになる。

IX. 結語にかえて；東北アジア岩画の変遷と相互の関係

以上の検討を基に東北アジア全体の岩画の変遷を整理し、芝草里岩刻画の位置について述べることで結語に代えたい（図 30）。

夏家店下層期以前の新石器時代では、赤峰地区と沿アムール地域に岩画が認められる。また、韓半島南部の盤亀台や川前里の面刻技法による動物画などが新石器時代まで遡上するものであれば、この時期にも認められることとなる。これら 3 地域の相互の関係についてはほとんど認めることができない。

夏家店下層期併行期では、赤峰地区と沿アムール地域に岩画が認められる。特に沿アムール地域では、サカチ・アリャンの多くの岩画、シェレメチエヴォ、キヤ川など岩画が盛んに製作される時期であるヴォズネセノフカ文化期前後に該当する。韓半島南部については、上述したとおり、筆者は盤亀台や川前里の線刻技法による岩刻画を夏家店上層期併行期に編年したため、これに先行する面刻技法動物画などがこの時期に該当する可能性が高い。この時期の 3 地域の関係については不明な点が多い。大塚和義の主張する「岩画の道」が成立するならば、一部の人面画に共通点がみられる赤峰地区と沿アムール地域に関係があったことになるが、判断の困難なところである。そして、芝草里岩刻画の形成について表 4 ①案が正しい場合、ヴォ

ズネセノフカ文化の南下および沿海州・牡丹江流域でのヴォズネセノフカ文化系土器の盛行と連動する形で、芝草里に岩刻画が製作されたと考えられる。

夏家店上層期併行期では赤峰地区、沿アムール地域、韓半島南部で岩刻画が認められる。このうち赤峰地区の岩画は、モンゴル高原の鹿石や岩刻画との関連性が強く、さらに、韓半島南部の盤亀台や川前里の線刻技法岩刻画に影響を及ぼしたものと考えられる。このようにモンゴル高原から赤峰地区を介して、韓半島南部にいたる岩画の影響関係は、琵琶形銅剣をはじめとする青銅器の動向と連動したものであると考えることができる。そして、芝草里岩刻画の形成について表 4 ⑤案が正しい場合、夏家店上層文化系の青銅器の拡がりとの関連があるものと考えられる。

夏家店上層期以降の初期鉄器時代では、赤峰地区、沿アムール地域、韓半島南部でそれぞれ岩画が認められる。特に韓半島南部では、墓域支石墓関連岩刻画や防牌形岩刻画が多数発見され、岩刻画製作の最盛期を迎える。しかし、この時期の 3 地域の岩画はそれぞれ独自性が強く、相互の関係は不分明である。但し、それよりも遅れる歴史時代の騎馬画などでは、赤峰地区と沿アムール地域の岩画に関連性が認められる可能性がある。

東北アジア岩画の変遷と相互の関係、そしてその中の芝草里岩刻画の位置は以上のとおりであるが、遺憾なことに資料および筆者の力量不足によりそれ以上、限定的な見解をここで提示することはできなかつた。今後の調査の進展を待って、さらに考察を深めていきたい。

本稿をなすにあたっては、ご教示・文献のご提供で次の諸先生・諸氏に大変お世話になりました。

姜奉遠、金羅英、金姓旭、金恩瑩、宋永鎮、申鍾煥、尹昊弼、河仁秀、徐光輝、中村大介、西谷正

特に中国・モンゴル文献収集において王達来氏のご協力がなければ本研究は遂行することができませんでした。記して感謝いたします。

〔註〕

- 1) 本稿では岩に絵画を描いたり刻んだものを岩画とし、特に刻んだり叩いたりして凹凸で表現したものを岩刻画とする。
- 2) 通常、渦文とは、渦巻いた線により構成された螺旋モチーフを指し、単純な円や同心円は含まれないが、報告者は同心円等についても渦文の範疇で報告している。このため本稿「II. 芝草里岩

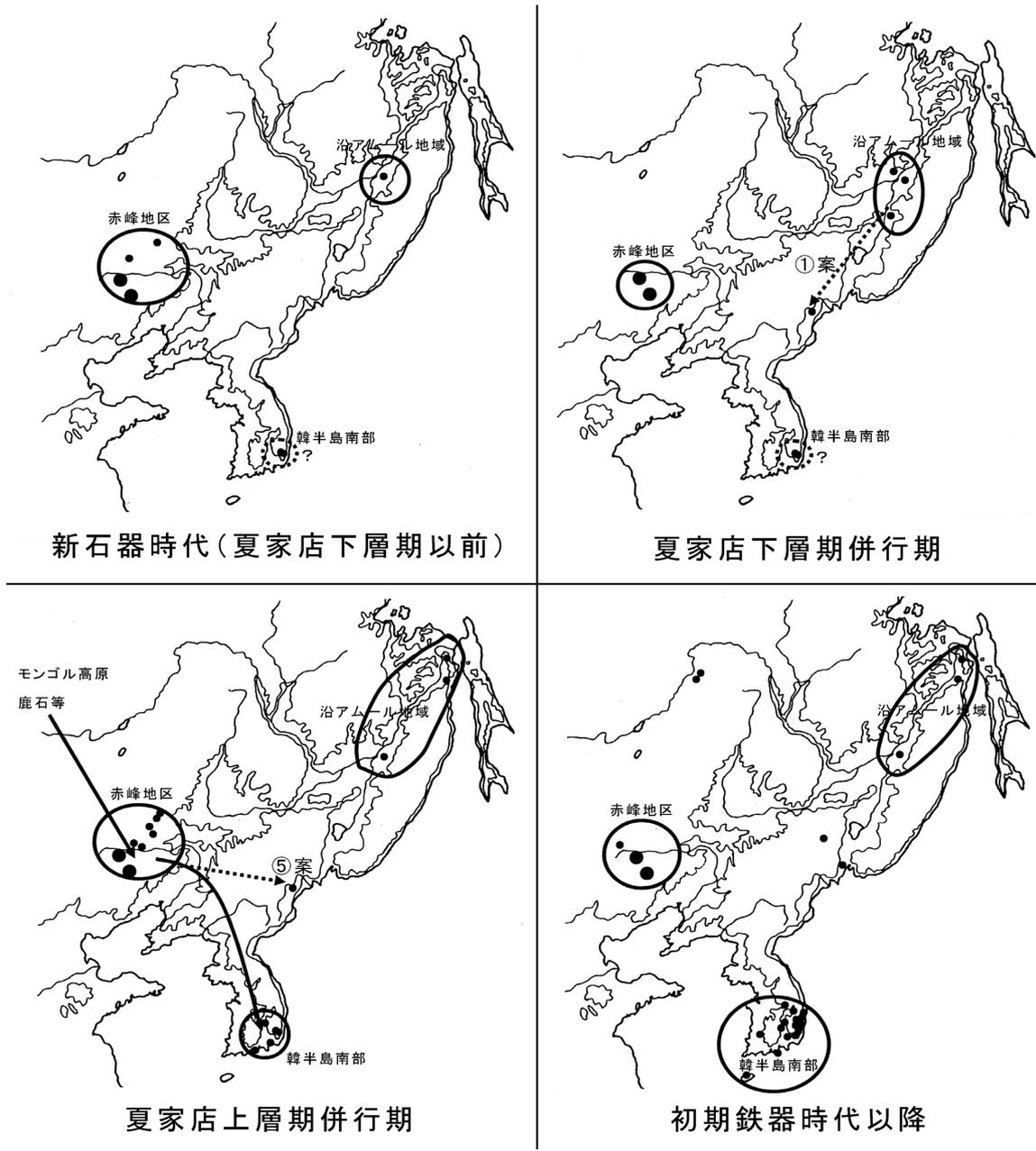


図 30 東北アジア岩画の展開

刻画の概要」では、報告者の渦文概念に基づいて整理する。

- 3) 斎光斗の紹介文では洞窟内の墓地で渦文土器と雷文土器が出土したとしているが、徐国泰の報告にはそのような事実は記載されていない。また、斎光斗は新石器時代末から鉄器時代にいたるさまざまな時期の住居址が発見されており、青銅器時代のものが中心であるため、岩刻画の年代は青銅器時代であると述べているが、これは虎谷のことであり、芝草里のことでない。
- 4) 現在はシカチ・アリヤンと称する。
- 5) 出版は1989年であるが、A.П.オクラドニコフは1981年に死去しているので、1971年の見解が出版されてから、10年以内に見解の変更があった模様である。

- 6) 洪格力図の原報告者は紅山文化の早い段階の墓葬であるとみているが、田広林は玉器の組成から興隆窪文化に帰属するとみている。
- 7) ユッパン(晏卮)とは韓半島における伝統的な双六のような遊戯であるユンノリ(晏 놀이)で使用される盤である。点列で円形を表現し、その内部を点列で十字形充填した文様をここでは指す。水谷里のほか七浦里崑崙山地区など韓半島で多く発見されている(김일권2003)。京畿道甕津郡北島面信島(国立文化財研究所2000)でも発見例があり、他の岩刻画とは分布が異なる。吉林省集安市禹山墓区JYM3319号墓の東南角でも人物像に重ねてユッパン形文が配置されている岩刻画が確認されている

る(孫仁杰2009)。

- 8) さらに西方のミノシンスク盆地ではアフアナシェヴォ文化期やタガール文化期の板石墓の板石に渦文や胴部に渦文のあるシカ画などが描かれる場合があり、これをA.II.オクラドニコフは沿アムール地域との関係を想定したが、A.H.リップスキーの指摘のとおり(リップスキー1983)、東北アジアの岩刻画との直接的な関係を想定するのは困難である。

[引用文献]

(韓文)

姜奉遠 2012 「盤龜台 岩刻画에 表出된 陸地動物의 再認識-動物飼育問題와 編年の 再検討-」 『韓國新石器研究』 23 : 133-167
 姜仁旭 2009 「러시아 沿海州 青銅器文化 調査研究의 成果와 課題」 『東北亞 青銅器文化 調査研究의 成果와 課題』 329-389, 学研文化社
 姜鍾薰 1999 「蔚州 川前里書石 銘文에 대한 一考察」 『蔚山研究』 1 : 45-65
 古澤義久 2014b 「東北아시아 新石器時代 土器의 交流」 『韓國 新石器時代 土器와 編年』 진인진, 408-450
 国立文化財研究所 2000 『軍事保護區域 文化遺蹟 地表調査報告書 京畿道篇』
 金權九 1999 「大谷里 盤龜台 岩刻画의 理解와 研究方向에 대하여」 『蔚山研究』 1 : 101-143
 金炳燮 2003 「密陽 살내遺蹟 調査成果」 『慶尙考古學』 2
 金炳燮 2009 「密陽地域 墓域式 支石墓에 대한 一考察」 『慶南研究』 1 : 21-53
 김성국 2009 「芝草里遺蹟」 『豆滿江流域一帶新石器時代遺蹟(1)』 朝鮮考古學全書5, 原始篇5, 진인진, 181-183
 金用珩 1990 『朝鮮考古學全書 原始篇(石器時代)』 科學百科事典綜合出版社
 金元龍 1973 『韓國美術全集1 原始美術』 同和出版公社
 金元龍 1980 「蔚州盤龜台岩刻画에 대하여」 『韓國考古學報』 9 : 6-22
 金元龍 1983 「芸術과 信仰」 『韓國史論』 13 : 306-343
 김일권 2003 「韓國 甌冠形 岩刻画의 文化性과 象徴性」 『國民大學校 博物館 學芸研究』 2003-3, 4 : 63-110
 金材胤 2008 「先史時代의 極東 全身像 土偶와 環東海文化圈」 『韓國上古史學報』 60 :
 金貞培 1997 「東北亞속의 韓國의 岩刻画」 『韓國史研究』 99・100 : 1-30
 김종찬 2013 「濟州島 光令里 岩刻画에 대한 一考察」 『光令川の 源流를 찾아서』 213-228
 노브고라도바, Э.А. (정석배訳) 1995 『蒙古의 先史時代』 學研文化社
 柳昌煥・김미영・황인찬・탁진원・이시내・강경화・이양희・서수자・김태순・강미정・박연숙・서순이・장향자・최은숙・하복성・김응정・구정혜 2012 『宜寧 馬双里・山南里遺蹟』 慶南發展研究院 歷史文化 調査研究報告書 第95冊
 大伽耶博物館 2008 『高靈 鳳坪里 岩刻画 發見 報道資料』

림용국 2002 「우리 나라 最初의 壁畫」 『民主朝鮮』 2002年8月13日, 4面
 文明大 1973 「蔚山の 先史時代 岩壁刻画」 『文化財』 7 : 33-40
 박승규・하진호・김수경 1998 『高靈池山洞30号墳』 嶺南埋藏文化財研究院 學術調査報告書 第13冊
 朴廷根 2000 「韓國의 岩刻画 研究 成果와 問題點」 『先史와 古代』 15 : 197-226
 朴廷根 2001 「韓國의 岩刻画 中 人物像에 대한 考察」 『民俗學研究』 9 : 33-56
 朴廷根 2003 「韓國岩刻画의 同心円에 對한 考察」 『國民大學校 博物館 學芸研究』 2003-3, 4 : 111-134
 釜山大學校博物館 1987 『陝川芋浦里E地區遺蹟』 釜山大學校 博物館 遺蹟調査報告書 第11輯
 社會科學院 歷史研究所・考古學研究所 1991 『朝鮮全史1 原始篇』 (第2版), 科學百科事典綜合出版社
 徐國泰 2004 「茂山郡 芝草里遺蹟에 대하여」 『朝鮮考古研究』 2004-2 : 9-14
 孫寶基 1973 「旧石器文化」 『韓國史 I』 國史編纂委員會
 宋桂鉉・洪潛植・李海蓮 1995 「東萊 福泉洞古墳群 第5次 發掘調査 概報」 『博物館研究論集』 3 : 1-117 (釜山廣域市立博物館)
 송정현・이영문 1988 「牛山里 내우 支石墓」 『住岩담 水沒地域 文化遺蹟發掘調査報告書Ⅱ』 全南大學校 博物館
 宋華燮 1993a 「韓半島 先史時代 幾何文岩刻画의 類型과 性格」 『先史와 古代』 5 : 113-145
 宋華燮 1993b 「南原 大谷里 幾何文岩刻画에 대하여」 『白山學報』 42 : 95-134
 宋華燮 1994 「先史時代 岩刻画에 나타난 石劍・石鏃의 樣式과 象徴」 『韓國考古學報』 31 : 45-74
 宋華燮 1996 「韓國 岩刻画의 信仰儀禮」 『韓國의 岩刻画』 한길사, 251-300
 申大坤 1998 「神體文岩刻画의 解稜」 『科技考古研究』 3 : 65-124
 申鍾煥・鄭東樂・孫貞美 2008 『高靈의 岩刻遺蹟』 大伽耶博物館 學術調査報告書5
 尹昊弼 2013 『築造와 儀禮로 본 支石墓社會 研究』 木浦大學校 大學院 博士學位 論文
 李健茂・崔鍾圭・朴方龍・김상면 1985 「月城郡・迎日郡地表調査報告」 『國立博物館 古蹟調査報告』 第17冊
 李白圭・吳東昱 2000 「辰泉洞 先史遺蹟」 『辰泉洞・月城洞 先史遺蹟』 慶北大學校博物館 叢書27
 李相吉 1996 「牌形岩刻画의 意味와 그 性格」 『韓國의 岩刻画』 한길사, 135-176
 이상목 2004 「蔚山 大谷里 盤龜台 先史遺蹟의 動物그림-生態的 特性과 季節性을 中心으로-」 『韓國考古學報』 52 : 35-68
 李采文・鄭基鎮 1992 『麗水 五林洞 支石墓』 全南大學校博物館
 이영주・김병섭・박소은 2007 『密陽 新安 先史遺蹟』 慶南發展研究院 歷史文化센터 調査研究報告書 第53冊
 李殷昌 1971 「高靈良田洞岩面調査略報」 『考古美術』 112 : 24-40

- 李夏雨 2011a 「韓国 同心円岩刻画의 象徴—물과 關連하여」 『東아시아古代學』 26
- 李夏雨 2011b 『韓國 岩刻画의 祭儀性』 學研文化社
- 李亨求 1996 「韓半島 岩刻画와 中國 岩刻画와의 比較」 『韓國의 岩刻画』 한길사, 303-332
- 李炯佑 2004 「嶺南地域 先史 岩刻画의 性格」 『大丘史學』 76 : 1-27
- 任世權 1996 「韓國 岩刻画의 源流」 『韓國의 岩刻画』 한길사, 231-248
- 任世權 1999 『韓國의 岩刻画』 대원사
- 任孝宰 1978 『欣岩里住居址4』 서울대학교考古人類學叢刊 第8冊
- 張明洙 1996 「韓國 岩刻画의 編年」 『韓國의 岩刻画』 한길사, 179-227
- 張明洙 1997 「岩刻画에 나타난 性信仰 모습」 『古文化』 50 : 345-370
- 張明洙 1999 「蔚山 大谷里 岩刻画에 나타난 信仰意識」 『蔚山研究』 1 : 67-100
- 張明洙 2003 「新例 刀劍類 그림 岩刻画의 文化性格에 대한 檢討」 『國民大學校 博物館 學芸研究』 2003-3, 4 : 43-62
- 全虎兌 1996 「蔚州 大谷里·川前里 岩刻画」 『韓國의 岩刻画』 한길사, 45-95
- 全虎兌 1999 「蔚州 川前里 書石 細線刻画 研究」 『蔚山研究』 1 : 9-43
- 정동찬 1988 「蔚州 大谷里 先史마위그림의 研究」 『孫寶基博士 停年紀念 考古人類學論叢』 389-434
- 濟州文化藝術財團 2007 『濟州 外都洞遺蹟Ⅱ』 濟州藝術文化財團 發掘調查報告書 20冊
- 趙榮濟·宋永鎮·鄭智善 2011 『泗川 本村里遺蹟』 慶尙大學校博物館 研究叢書 第33輯
- 中村大介 2012 「東北亞 青銅器·初期鐵器時代 首長墓 副葬遺物の 展開」 『韓國上古史學報』 75 : 79-112
- 池健吉 1978 「礼山東西里石棺墓出土青銅一括遺物」 『百濟研究』 9 : 151-181
- 昌原文化財研究所 1996 『咸安岩刻画古墳』 學術調查報告 第3輯
- 최광식 2007 「北韓의 茂山郡 芝草里 岩刻画」 『先史와 古代』 26 : 307-310
- 崔憲燮 1992 「咸安 道項里 先史遺蹟」 『韓國上古史學報』 10 : 605-679
- 河仁秀 2007 「東三洞貝塚文化에 대한 斷想」 『東三洞貝塚 淨化地域 發掘調查報告書』 釜山博物館 學術研究叢書 24集 : 137-164
- 河仁秀 2012 「盤龜台 岩刻画의 造成時期論-東三洞貝塚 資料를 中心으로-」 『韓國新石器研究』 23 : 49-74
- 韓炳三 1971 「先史時代 農耕文青銅器에 대하여」 『考古美術』 112 : 2-13
- 韓炳三·李健茂 1977 『南城里石棺墓』 國立博物館古蹟調查報告 第10冊
- 韓馨徹 1996 「迎日·慶州 地域의 岩刻画」 『韓國의 岩刻画』 한길사, 99-132
- 黃基德 1962 「豆滿江 流域의 新石器 時代 文化」 『文化遺產』 1962-1 : 1-32
- 黃基德 1975 「茂山범의구석遺蹟 發掘報告」 『考古民俗論文集』 6 : 124-226
- 黃相一·尹順玉 2000 「蔚山 太和江 中·上流部 Holocene 自然環境과 先史人의 生活 變化」 『韓國考古學報』 43 : 67-112
- 黃壽永·文明大 1984 『盤龜台 蔚州岩壁彫刻』 東國大學校出版部
- 黃龍渾 1975 「韓半島 先史時代 岩刻의 製作技術과 形式分類」 『考古美術』 127 : 2-14
- (露文)
- Бродянский, Д.Л. 1987 *Введение в Дальневосточную археологию*. Владивосток. (브로단스키, 데.엘. (정석배譯) 1996 『沿海州의 考古學』 學研文化社)
- Бродянский, Д.Л., Панкратьева, Н.А. 2003 Два загадочных петроглифа в музеях Владивостока. *Древности Приморья и Приамурья в контексте тихоокеанской археологии*. 136-139. Владивосток.
- Волков, В.В. 1981 *Оленные камни Монголии*. Улан-Батор.
- Клюев, Н.А., Гарковик, А.В. 2002 Исследования многослойного памятника Дальний Кут-15 в Приморье в 2000г. *Археология и культурная антропология Дальнего Востока и Центральной Азии*. 68-81. Владивосток.
- Клюев, Н.А., Яншина, О.В. 2002 Финальный неолит Приморья: Новый взгляд на старую проблему. *Россия и АТР* 2002-3 : 67-78. Владивосток.
- Коломиец, С.А., Афремов, П.Я., Дорофеева, Н.А. 2002 Итоги полевых исследований памятника Глазовка-городище. *Археология и культурная антропология Дальнего Востока*. 142-155. Владивосток.
- Кузнецов, А.М., Якупов, М.А. 2004 Раскопки стоянки Горбатка 3. 『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅰ』 73-80
- Окладников, А.П. 1968 Из предыстории искусства Амурских народов (Петроглифы на р.Кия, Усури). *СА*. 1968-4, 46-57.
- Окладников, А.П. 1971 *Петроглифы Нижнего Амура*. Ленинград.
- Окладников, А.П. 1972 Отчет о раскопках древнего поселения у села Вознесенского на Амуре, 1966 г. *Материалы по археологии Сибири и Дальнего Востока*. Ч.1. 3-35. Новосибирск.
- Окладников, А.П. 1973 *Древнее поселение Кондон (Приамурье)*. Новосибирск
- Окладников, А.П. 1974 *Петроглифы Байкала-памятники древней культуры народов Сибири*. Новосибирск.
- Окладников, А.П. 1977 *Петроглифы Верхней Лены*. Ленинград.
- Окладников, А.П. 1981 *Петроглифы Чулутын-Гола (Монголия)*. Новосибирск.
- Окладников, А.П. 1989 Искусство неолитических племен Приморья и Приамурья. *История Дальнего Востока СССР с древнейших времен до XIX века*. 67-76. Москва. (奧克拉德尼科夫, А. П. (楊志軍譯) 1993 「濱海地区和阿穆爾河沿岸新石器時代部落의 藝術」 『蘇聯遠東史 - 從遠古到 17 世紀』 哈爾濱出版社, 81-91)

- Окладников, А.П., Дервянко, А.П. 1973 *Далекое прошлое Приморья и Приамурья*. Владивосток.
- Сапфиров, Д.А. 1989 Типологические комплексы стоянки Черниговка I. *Древние культуры Дальнего Востока СССР*. 11-15. Владивосток.
- (中文)
- 董劍英・張松柏 1992 「内蒙古巴林右旗東馬鬃山岩画調查」『遼海文物學刊』1992-1: 64-66, 86
- 董文義・韓仁信 1987 「内蒙古巴林右旗那斯台遺址調查」『考古』1987-6: 507-518
- 馮恩学 2002 『俄国東西伯利亞与遠東考古』吉林大學出版社
- 韓立新 2004 「内蒙古克什克騰旗岩画」『内蒙古文物考古』2004-1: 39, 40, 58
- 黑龍江省博物館 1972 「黑龍江省海林縣牡丹江右岸的古代摩崖壁画」『考古』1972-5: 36
- 蓋山林 1986 『陰山岩画』文物出版社
- 蓋山林 1989 『烏蘭察布岩画』文物出版社
- 蓋山林 1993 「我国北方草原岩画区域特征初論」『考古与文物』1993-5:
- 蓋山林・蓋志浩 2002 『内蒙古岩画的文化解讀』北京圖書館出版社
- 吉平 1994 「巴林右旗床金溝發現一處岩画」『内蒙古文物考古文集』1: 72-73
- 賈鴻恩 1984 「内蒙古翁牛特旗三星他拉村發現玉龍」『文物』1984-6: 6, 10
- 内蒙古自治区文物考古研究所 2004 『白音長汗』科学出版社
- 潘玲 2008 「論鹿石的年代及相關問題」『考古學報』2008-3: 311-335
- 朴潤武 1985 「金谷水庫南山遺址試掘簡報」『博物館研究』1985-3: 69-72
- 孫繼民 1994 「克什克騰旗岩画述略」『内蒙古文物考古』1994-1: 106-115, 75
- 孫仁杰 2009 「洞溝古墓群禹山墓區JYM3319号墓發掘報告」『吉林集安高句麗墓葬報告集』260-276, 文物出版社
- 塔拉・曹建恩・党郁・李義 2009 『小黑石溝-夏家店上層文化遺址發掘報告』科学出版社
- 田広林 2004 「内蒙古赤峰市陰河中下游古代岩画的調查」『考古』2004-12: 13-26
- 王培新・温海濱・朴龍淵・李強・張志立 1992 「吉林琿春新興洞墓地發掘報告」『北方文物』1992-1: 3-9
- 王晓琨・張文靜 2014 「中国人人像岩画傳播路線探析」『東南文化』2014-4: 70-75
- 吳甲才 2007 「内蒙古翁牛特旗白廟子山發現新石器時代早期北斗七星岩画」『北方文物』2007-4: 1-4
- 許成・衛忠 1993 『賀蘭山岩画』文物出版社
- 楊占風 2013 『鴨綠江、図們江及烏蘇里江流域新石器文化研究』文物出版社
- 張松柏 1996 「内蒙古白岔河沿岸新發現的動物岩画」『北方文物』1996-1: 12-15, 22
- 張松柏 1998a 「赤峰市新發現的古代岩画」『内蒙古文物考古』1998-2: 1-5
- 張松柏 1998b 「赤峰市白岔河兩岸的人物岩画」『内蒙古文物考古』1998-2: 6-8, 21
- 張松柏・劉志一 1984 「内蒙古白岔河流域岩画調查報告」『文物』1984-2: 70-76
- 張志成・李麗・申佐軍・于觀春・王祥濱 2011 「綏芬河新石器遺址調查簡報」『文物春秋』2011-6: 32-36
- 張志成・李麗・申佐軍・于觀春・王祥濱 2012 「黑龍江省綏芬河市新石器-商周時代遺址調查報告」『北方文物』2012-2: 3-10
- 趙国棟 1992 「赤峰地区又發現兩處岩画」『内蒙古文物考古』1992-1, 2: 143-145
- 趙振才 1987 「大興安嶺原始森林里的岩画古跡」『北方文物』1987-4: 43-46
- 周興華 1991 『中衛岩画』寧夏人民出版社
- (モンゴル文)
- Баярхүү, Н., Төрбат, Ц. 2010 Монгол Алтайн өвөр бэлэйн буган чулуун хөшөөд. *Археологийн Судлал*. (IX) XXIX. Улаанбаатар.
- Цэвээндорж, Д. 1979 Монгол нутгаас олдсон зарим буган чулуун хөшөө. *Археологийн Судлал*. VII. 36-85. Улаанбаатар.
- (日文)
- 伊藤慎二 2006 「ロシア極東の新石器文化と北海道」『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅲ』, 59-90
- 伊藤慎二・内田宏美 2004 「土器」『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅰ』, 96-97
- 白杵勲 1989 「沿海州青銅器時代遺跡の再考」『筑波大学先史学・考古学研究』1: 97-119
- 江坂輝彌 1982 「縄文土器文化時代の宗教的遺構・遺物と朝鮮半島における同時代の宗教的遺構・遺物について」『古文化談叢』10: 1-7
- 大塚和義 2005 「岩画の道 - アジアが共有するイメージのネットワーク」『文化遺産の世界』18,
- 大貫静夫 1992 「豆満江流域を中心とする日本海沿岸の極東平底土器」『先史考古学論集』2: 47-78
- 大貫静夫 1996 「欣岩里類型土器の系譜論をめぐる」『東北アジアの考古学第二 [樞域]』71-94, 兪은삼
- 岡内三眞 1983 「朝鮮の異形有文青銅器の製作技術」『考古学雑誌』69-2:
- オクラードニコフ, アレクセイ・パウロウィチ (加藤九祚訳) 1968 『黄金のトナカイ』美術出版社
- 後藤直 1982 「朝鮮の青銅器と土器・石器」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』, 243-296
- 佐賀県立博物館 1973 『装飾古墳の壁画 原始美術の神秘をさぐる』
- 高濱秀 1999 「大興安嶺からアルタイまで」『中央ユーラシアの考古学』同成社, 53-136
- 中村大介 2007 「遼寧式銅劍の系統的展開と起源」『中国考古学』7:

1-29

- 畠山禎 1992 「北アジアの鹿石」『古文化談叢』27：207-225
- 藤田亮策・梅原末治・小泉顕夫 1925 『南朝鮮に於ける漢代の遺蹟』
大正十一年度古蹟調査報告第二冊
- 古澤義久 2013 「新岩里出土青銅刀の年代について」『中国考古学』
13：133-157
- 古澤義久 2014a 「東北アジア先史時代偶像・動物形製品の変遷と
地域性」『東アジア古文化論攷 1』103-122, 中国書店
- 三上次男 1977 「北九州の装飾古墳と韓国高霊の岩壁画」『日本歴史』
344：123-126
- リプスキー, A. H. (岩本義雄訳) 1983 「エニセイの太陽光線のある
仮面の意義についての問題によせて」『シベリア極東の考古学 3
東シベリア篇』河出書房新社, 171-185

(英文)

- Furusawa, Y. 2007 A study on the prehistoric spindle-whorls in the
Russian south Primorye and its neighborhoods-From Neolithic
age to the early Iron age-. 『東北アジアの環境変化と生業システ
ム』 pp.86-109. Kumamoto.

Okladnikov, A.P. 1981 *Art of the Amur. Ancient Art of the Russian Far
East*. New York-Leningrad.

[図版出典]

- 図1 筆者作図、図2 徐国泰 2004、図3 徐国泰 2004、図4 Okladnikov
1971、Бродянский、Панкратьева 2003、図5 黒龍江省博物館 1972、
図6～10 Okladnikov 1971、図11 蓋山林・蓋志浩 2002、吉平
1994、呉甲才 2007、図12 田広林 2004、張松柏 1998a、図13 孫繼
民 1994、蓋山林・蓋志浩 2002、田広林 2004、図14 田広林 2004、
塔拉等 2009、図15 田広林 2004、Цэвээндорж 1979、潘玲 2008、
Баярхүү, Төрбат 2010、図16～19 張明洙 1996、図20 田広林 2004、
張明洙 1996、宋華燮 1996、図21 李夏雨 2011b、図22 張明洙
1996、韓馨徹 1996、図23 張明洙 1996、申鍾煥・鄭東樂・孫貞美
2008、図24 任世権 1996、張明洙 1996、図25 李健茂 外 1985、李
白圭・呉東昱 2000、釜山大学校博物館 1987、李夏雨 2011b、昌原
文化財研究所 1996、図26 이영주・김병섭・박소은 2007、장향자
외 2012、張明洙 2003、李榮文・鄭基鎮 1992、趙榮濟・宋永鎮・鄭
智善 2011、図27 李夏雨 2011b、図28 Ключев, Гарковик 2002、図29
Бродянский 1987

함경북도 무산군 지초리 암각화를 둘러싼 제문제 - 동북아시아 암각화의 편년과 계통 -

후루사와 요시히사

본고에서는 함경북도 무산군에 소재하는 지초리 암각화의 연대와 계통에 대하여 검토하였다. 먼저 지초리 주변에 소재하는 암각화의 편년을 각각 살펴보고, 각 지역에서의 타래문, 동심원문, 능형문 암각화의 귀속시기를 밝혔다. 그 결과 지초리의 연대 및 계통에 대하여 11 가지의 가능성을 제시하였다. 두만강 중류역과 주변의 암각화지대 사이에는 각각 암각화 공백·빈약지대가 있다. 그래서 암각화 이외의 문화요소에 주목하면, 암각화 공백·빈약지대를 초월해서 두만강 중류역에 문화적 영향을 끼쳤다고 추정되는 것은, 보즈네세노브카문화기의 연아무르지역과의 관계와, 하가점 상층기의 적봉지구와의 관계이며, 11 안 중 이 두 개의 안이 가능성이 높다고 생각된다. 지초리의 연대는, 보즈네세노브카문화기의 연아무르지역과 관계 있을 경우는 신석기시대 후기·말기, 하가점 상층기의 적봉지구와 관계 있을 경우는 청동기시대가 된다. 어느 편년안이 맞는지를 판단하기 위해서는 더 많은 자료의 증가를 기다리지 않으면 안된다.